

# 教科書から見る対日認識

## —中国と台湾の教科書の比較—

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科

王雪萍

章立て

序章 問題の所在

第一章 両岸の教科書制度

第1節 中国の教科書制度

第2節 台湾の教科書制度

第二章 中国の教科書に見られる日本

第1節 戦後初期国交断絶した時期の歴史教育（49-71年）

第2節 国交正常化後の歴史教育（72-89年）

第3節 江沢民政権時期の歴史教育（90-99年）

第4節 歴史教科書以外の教科書に見る対日記述

1. 政治

2. 国語

3. 社会

第5節 中国の教科書に見る対日認識の変化

第三章 台湾の教科書に見られる日本

第1節 友好関係を重視する歴史教育（49-71年）

第2節 国交断絶後の歴史教育（72-87年）

第3節 李登輝政権時期の歴史教育（1988-2000年）

第4節 『認識台湾』に現れた台湾の新しい日本認識

第5節 歴史教科書以外の教科書に見る対日記述

1. 社会

2. 国語

第6節 台湾の教科書に見る対日認識の変化

第四章 中国と台湾の教科書記述の比較

第1節 南京大虐殺について

第2節 日本の植民統治について

第3節 現在の日本について

終章 結論

研究資料

参考文献

## 序章、問題の所在

アジア地域において、地域の平和と繁栄に向けた日本の積極的貢献については、ほぼ合意がすでに形成されている。とくに 1997 年後半に発生したアジア通貨・金融危機の克服過程を通じて、こうした合意が確認されるとともに、期待も大きくなっている。

しかしながら、1930 年代から 40 年代に日本が行った侵略に関する記憶は半世紀以上がすぎたにもかかわらず、アジアの人々のなかになお残ったままである。こうした“歴史問題”は感情面にとどまらず、地域の政治や安全保障の領域にまでなお影響を与える可能性がないわけではない。21 世紀は世界各国が協調し、共に発展する時代となるべきである。そのためには、アジア地域においても、各国・国民間の相互理解が重要な課題になってくる。そのとき、日本にとって、アジア諸国との相互理解に向けた重要な出発点の一つはアジア諸国の側の対日歴史認識を十分に理解することにある。

しかし、アジアといっても、アジア地域は多様である。対日歴史認識についても、国や地域によって同じではない。たとえば朝鮮半島とともに、日本にとって相互理解が極めて重要な隣接する北東アジア地域を構成する中国についてもそういえる。中国側が「一つの中国」と主張する台湾海峡を挟む兩岸（中国大陸と台湾）において、対日認識の相違は顕著である。

一方で、中国（中国大陸）側では、1998 年 11 月に来日した江沢民国家主席による「歴史」への執拗な言及にみられたように、日本による対中侵略という過去の歴史を忘れないとする姿勢が顕著である<sup>1</sup>。江沢民主席の訪日後、歴史認識に対する強い姿勢は江主席特有のものだとも指摘された。しかし、1999 年 9 月に公表された読売新聞社とギャラップ社が実施した「日中共同世論調査」によれば、「日本と聞いて真っ先に何を思い浮かべるか」との質問に対して、「侵略戦争・抗日戦争」との回答が 39%でトップとなり、「発達した経済」との回答が 12%でこれに続いた。そして「侵略者・好戦的国家」が 6%、「南京大虐殺」が 4%、「凶暴・残虐・野蛮・人間性なし」が 3%の回答など、戦争と関連したイメージが上位を占めたのである<sup>2</sup>。この調査結果だけですべてを語ることはできないが、少なくとも、中国では国家を代表する江沢民主席だけでなく、一般国民の間にも「歴史問題」への拘りがあるということだけはいえそうである。

他方で、台湾では、政府から国民レベルにいたるまで、過去の日本による植民統治に対する批判がないわけではないが、評価する声さえも多く聞かれる。例えば、台湾で初めて住民により直接選出された李登輝総統（当時）は「植民地時代に日本が残したものは大きい。批判する一方で、もっと科学的な観点から評価しなければ、歴史を理解することはできない」<sup>3</sup>と述べており、中国大陸の指導者と違う歴史認識を持っているのは明らかである。

台湾は中国大陸と同じく戦争中に被害を受け、しかも 1895 年から 50 年間にわたる日本の植民地支配を受けてきたにもかかわらず、全体的に見れば、中国側よりも柔軟な対日認識をもっているように思われる。

その要因と背景は様々である。たとえば台湾海峡を挟む中台兩岸の政治制度の違いもその一つであろう。また政治だけでなく、内戦に敗北した国民党政権（中華民国）が台湾に撤退し、大陸に中華人民共和国が建国された 1949 年以来、50 年以上にわたって台湾海峡を挟んで兩岸が分離した状況の中で、台湾で形成された経済や社会、文化や人々の意識も相違をもたらした要因の一つであろう。

台湾海峡を挟む兩岸<sup>4</sup>の人々の対日認識は戦後 50 年間にいかに形成され、いかに相違が醸成されてきたのか。この問題を考察するために、本稿では、この問題を考察するために、兩岸（中国大陸と台湾）の小、中、高等学校の教科書に注目し、教科書に記述された日本問題を比較検討する。比較検討の作業の中で、兩岸の対日認識と政府の対日政策との相関関係についても分析を試みたい。

日本が今後アジア諸国との関係を深めていこうとするとき、日本自身がかかわった歴史問題に真摯に対応しなければならない。日本がアジア諸国との間で、歴史問題について共通する認識を確立することは極めて難しいかもしれない。歴史認識は、それぞれの国独自

の歴史、文化や価値観によって形成されているからだ。アジア地域でも、歴史認識は一樣ではない。しかし、少なくともそれぞれが抱く歴史認識、とくに歴史にかかわる対日認識の違いを理解し、違いが由来する要因と背景を理解しておくことは重要である。「一つの中国」といわれながら、中国と台湾が対日歴史認識について共通性ととも相違性があり、それを確認しておくことは今後の日本の中台関係を考える手がかりを与えてくれるはずである。

これまでの中国の教科書について、段瑞聡<sup>5</sup>、並木頼寿<sup>6</sup>や蕭勝文<sup>7</sup>などの研究がある。台湾の教科書と日台関係の関連性を研究して、注目されるのは平松茂雄らの業績<sup>8</sup>である。平松氏の研究は90年代末に台湾で現れた日本植民統治に対する肯定的な評価を注目し、『認識台湾』の教科書に現れた対日認識の変化を強調した。例えば、「日本語は台湾人にとって、近代化された知識を吸収する主要な手段となり、台湾社会の近代化を促進した」と述べるように日本の植民統治を評価する部分を強調する形で、今の台湾の教科書に現れている日本像はきわめて良いという印象を与えている。

また、2001年の教科書問題は日中韓の間に論争が開始後、産経新聞社の前中国総局長の古森義久氏による中国の教科書の対日記述についての分析報道は注目される<sup>9</sup>。古森氏は教科書の時代性などを重視し、小、中、高等学校の教科書から中国の教科書に書かれた日本像を分析しているものの、近代日本の中国侵略の部分しか言及せず、中国の教科書に戦争中の残酷な日本しか記述されていないという印象を与えている。

以上の研究には、いずれについても優れた知見がみられる。しかしながら、中国と台湾の一時期あるいは小、中、高校の一部の教科書のみを分析対象にし、中国と台湾の教科書の中で日本の全体像を捉えているとはいいがたい。そこで、本研究は、中国における内戦が事実上終了した1949年から2001年までの50年余における中国と台湾の小、中、高校の歴史教科書を中心として他の科目も含めた教科書について日本に関連した記述内容を包括的に比較検討する<sup>10</sup>。研究手順として、両岸の教科書の対日記述を項目別に統計し、時代の変化よっての総合的な変化を探る。また、対日記述の態度の変化を対日記述の項目に分類しながら、種類別の変化を全体的な変化に取り込んで、50年余りの対日記述の変化と不変の両面を分析する。最後に、データー分析にもとづき、事例研究を通じて、中国と台湾の教科書の対日記述と対日政策の異同を分析するのである。

## 第一章 兩岸の教科書制度

### 第1節 中国の教科書制度

1949年10月1日に中華人民共和国が成立して以後、中国では全国統一の教科書制度が敷かれてきた。国家教育委員会（現在の教育部）<sup>11</sup>が制定した『教学大綱』<sup>12</sup>に基づいて、教科書はこの委員会直属の下部機構である人民教育出版社によって編纂・出版されてきた。49年から51年までは、革命根拠地<sup>13</sup>での経験を取り入れながらも、1949年以前の中華民国時期の教育システムが基本的に維持されていた。またこの時期には、12年制の小中学校の各科目の教科書が編纂された。その後も計8回「教学大綱」が改訂され、教科書も改版された。60年からは10年制の小中学制と12年制の小中学制を並存することになり、60年から61年までに前者に向けた新教科書が編集された。66年から76年までの文化大革命時期には平常の学校教育が破壊され、教科書は各省、各地域各自に編集されるようになり、人民教育出版社が独自に教科書を編集することはほとんどなかった。78年には10年制の小中学校「教学大綱」の発布にともなって、各科目の教科書が新しく編集され、全国に配布された。そして80年代初期から80年代半ばにかけて10年制と12年制が並存した。

1988年末に義務教育段階の小学校・中学校の『教学大綱（初審稿）』が発表されたことを機に、教科書制度は従来の国定制から検定制に変わった<sup>14</sup>。人民教育出版社以外の部門（特に各省の教育委員会）が、国家教育委員会策定の「教学大綱」を逸脱しないという条件も下ではあったが、独自に教科書を編纂することも多くなった。ただし編纂された教科書は、必ず国家教育委員会或いは各省の教育委員会に直属する部門の中小学教材審定委員の審査

を受けなければならなかった。とくに、大学入試は基本的に国家教育委員会が試験問題を作成する全国統一試験であり、したがって大部分の学校は主要科目において人民教育出版社が編集する教科書を採用してきた。入学試験は教科書に多く依拠していることから、学校教育においては教科書学習が中心になっている。

中国の学校教育では、「德育教育」が重要な地位に置かれている。小中学校德育教育の基本任務は、学生を「社会主義祖国を愛する」、「社会公共道徳」「文明行動の習慣」「紀律と法律を守る」公民に育てることにあるとされてきたのである。「德育教育」の形式と方式は小学思想品德科目、中学、高校の思想政治科目及び各科目の教育と他の校内校外教育の形で行われる<sup>15</sup>。歴史教育にも「德育教育」の精神が含まれており、歴史科だけではなく、社会、国語、思想品德、政治などの科目にも含まれている。

こうした状況を踏まえて、中国側の教科書分析では中国政府の政策を重視し、1949年から現在までの各版の人民教育出版社で編集・出版された小学校、中学校、高校の『歴史』<sup>16</sup>、『社会』<sup>17</sup>、『国語』、『政治』の各科目の教科書を対象とする。

## 第2節 台湾の教科書制度

1949年に中華民国政府が台湾に撤退してから暫くは、引き続き1948年に定められた全国各省共通の小学校、中学校、高校の『課程標準』にもとづいて編集された教科書が使用された。また「共産党に反対し、ロシアに反抗」するという基本的な国策に従い、1952年に小学の『国語』と『社会』の両科目と中学と高校の『歴史』、『国語』、『公民』と『地理』の四科目について、『課程標準』を修訂した。その後、2001年までに『国民小学課程標準』は62年、68年、75年、95年、2001年と計5回改訂され<sup>18</sup>、『国民中学課程標準』は55年、62年、68年、72年、83年、85年、94年、2001年と計8回改訂され<sup>19</sup>、『高級中学課程標準』は55年、62年、64年、71年、83年、95年と計6回改訂された<sup>20</sup>。国立編訳館は以上の『課程標準』にもとづいて教科書を編集したが、注目すべきは同じ『課程標準』にもとづいて編纂されてはいても、教科書には違いが見られることである。

台湾では1968年に6年間の義務教育制度が9年間に変わり、68年に小学校と中学校だけについては9年義務教育の方針にしたがって『課程標準』を新しく策定し、教科書についても編集しなおした。小学と中学では現在まで全国統一の国定教科書制度を維持されているが、高校については99年の統一教科書の「統編制度」から自由編集を許される「審定制度」に変更された<sup>21</sup>。しかしながら、台湾でも中国と同じく大学入試は統一試験のため、国立編訳館が編集した教科書が採用されるケースが多い。

大多数の『課程標準』には、「民族精神教育を強化する」という項目が『公民』、『国語』、『歴史』、『社会』、『地理』、『音楽』や『美術』など、文科系授業の特色の部分に盛り込まれた。「民族精神教育を強化する」とは、「教育を通して学生が国家を愛し、同胞を愛し、皆と仲良くでき、責任感を持ち、紀律を守り、中華民族道徳文化を表現し、立派な中国人に成長させること」である<sup>22</sup>。歴史教育の主題は、「国家を愛する、民族を愛する思想を強化すること」である<sup>23</sup>。この「民族精神教育」は『歴史』、『国語』や『社会』など文科系の授業にみられ、外国に対する認識においてもみられている。

そこで、台湾側の教科書分析では、1949年から現在まで国立編訳館によって編集・出版された小学、中学や高校の『歴史』<sup>24</sup>、『社会』<sup>25</sup>と『国語』の教科書を対象とする。

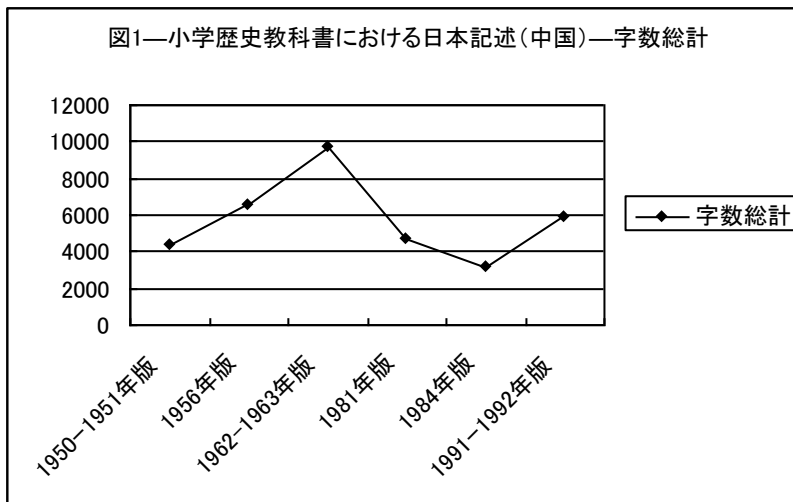
## 第二章 中国の教科書に見られる日本

中国と日本は近くて、遠い国と言われる。そうと言われる要因の一つが50年前の戦争がもたらした影の部分である。中国人は歴史問題に拘っているとされることが多い。それでは、中国の共産党政府は、如何なる方針の下で学生に対して日本を教えているのか。中国人の日本認識の基礎は、どうなっているのか。時代によって変化があるのか、あるとすればどのような内容であるのか。本章では、歴史教科書を中心に、中国の小、中、高等学校の国定教科書にみられる対日認識について検討する。

### 第1節 戦後初期国交断絶した時期の歴史教育（49-71年）

中華人民共和国の建国直後には、中国では全国統一の教科書制度が敷かれた。しかし、共産党にとって全国統治の経験は初めてであり、全国で通用する教科書がないため、当初は中華民国時代の教材を継続して使用したほか、共産党の根拠地で使われた教科書の経験を用いて民国の教科書を修正して使用した。

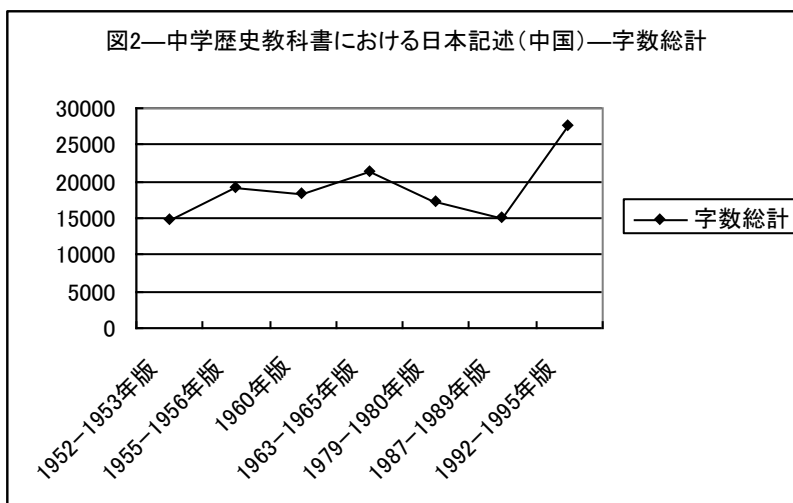
それと同時に、新中国の教育方針に沿う教科書の作成も開始した。1950年から51年には、初めての『教学大綱』が作成された。そして50年から53年にかけて、小、中、高校の教科書が編纂された。この時期は中国が「ソ連に学ぶ」時期であり、教科書にもこの傾向が見られた<sup>26</sup>。例えば、第2次世界大戦末のソ連による対日参戦について、小学校と中学校の教科書<sup>27</sup>ともにソ連の対日参戦は中国に対する偉大な援助という形で紹介された。

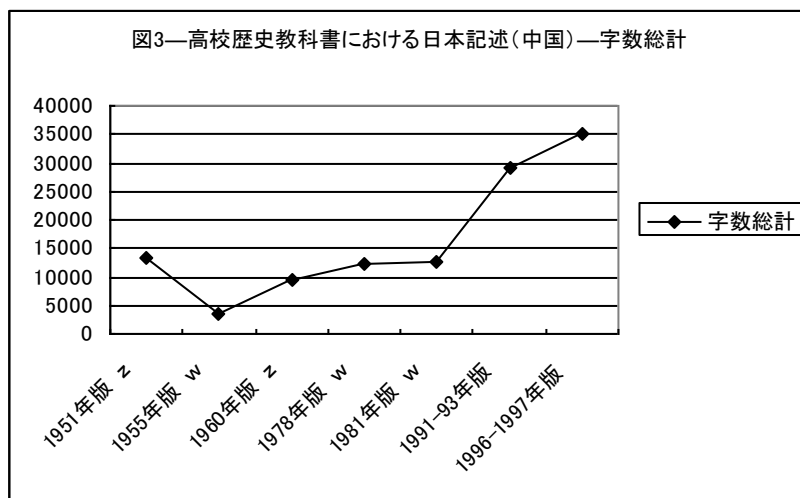


50年代初期の歴史教科書では日本に対する記述は量的にそう多くなく(図1、図2、図3)、対日記述はいずれの学年の教科書でも近代日本に集中し(図4、図5、図6)、近代日本の侵略行為とそれに反抗する中国側の活動についての記述が対日記述の90%前後になっている(総字数)。

ただし近代日本については、侵略行為だけでなく、明治維新による日本の「富強強国」の成功については、いずれの教科書においても言及されていた。とくに小学校と高校の教科書いずれでも、愛国者たちが中国を救うために、日本が西欧に学んだ経験を見習うべきだと提唱した<sup>28</sup>ことも率直に記述していたのである。

近代日本以外については、小学校の教科書が古代史における中日間の摩擦について、ほ



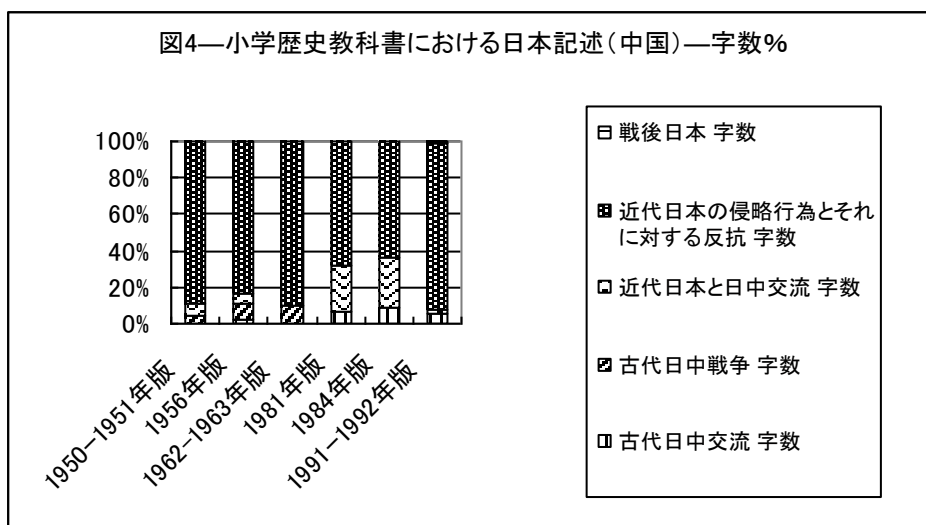


とんど記述はみられなかったのである。中学が漢時代と唐時代の中日友好交流の歴史について簡単に紹介するに留まった。

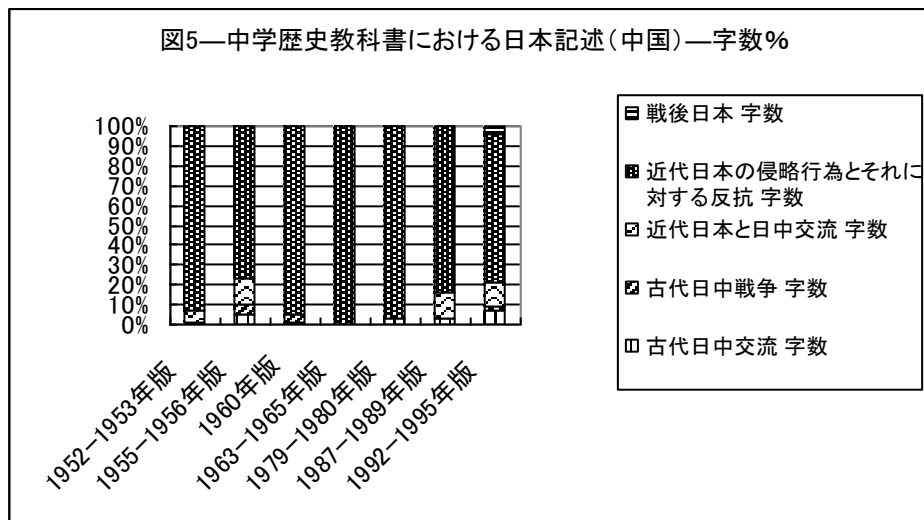
1956年版の小学と中学の教科書では、対日記述の量は大幅に増加した(図1、図2)。しかし、高校については減少した(図3)。減少の背景には、56年に出版された高校の歴史教科書が51年版とは違って世界史の教科書となったことがある。世界史では日本が世界各国の一つの国にすぎないのであり、その意味では対日記述が減少したのは当然である。

内容的にも、対日記述には1951年版と56年版との間に変化があった。変化は、日本の侵略と対日抵抗がいずれも圧倒的に多いが、古代から近代までの日中関係の友好交流と戦争などの歴史を全面的に紹介するようになった点にみられる(図4、図5)。とくに中学校と高校において、近代日本と中日交流にかんする記述の比率はかなり上昇した。変化の背景には中ソ関係の悪化、日本を含めた西側諸国との関係改善を求める平和共存路線への外交の転換と国内政策における経済発展優先方針への傾斜など、当時の中国の内外政策の転換があったように思われる。

次に、日本による侵略にかんする記述についてみてみよう(図7～図12)。「日本の侵略とそれに対する反抗」の項目において、中学校では字数の増加は若干にとどまったが、記述項目数は大幅に増加した。これは、中学校において幅広く戦争を教えようとしたことが推測される。また、この時期に新しくみられる特徴は、高校の世界史で日本の侵略に対するアジア諸国人民の反抗が強調されたことである。小学校については、51年版では対日記述は少なかったが、56年版では総字数の増加と同時に、各項目についても増加傾向がみ

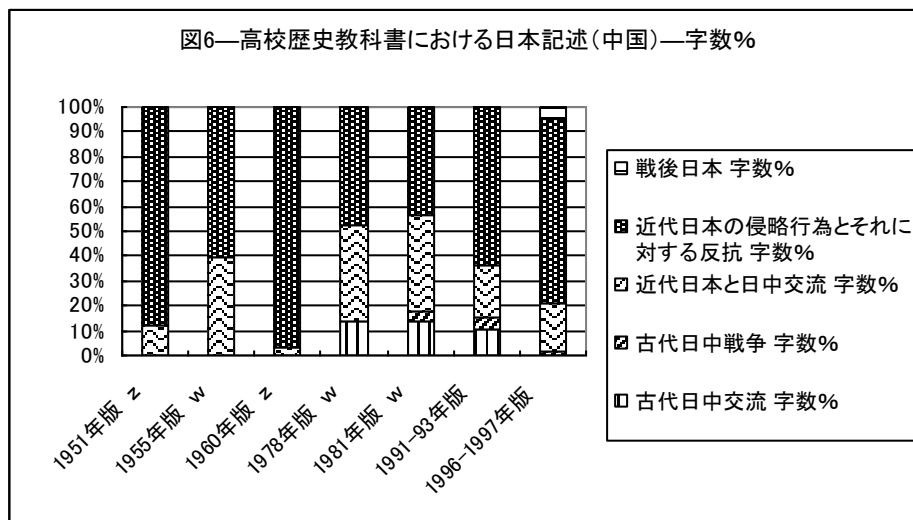


られる。



この時期には、小学校と中学校で古代史における両国間関係の歴史が多く紹介され、全体からみれば、1956年版の教科書では日本にかんする記述が多様化し、日本について幅広く紹介する傾向がみられたのである。

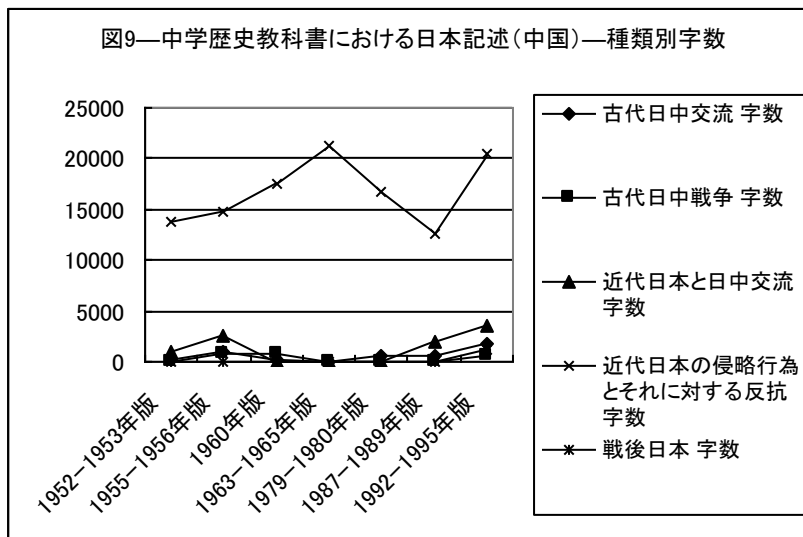
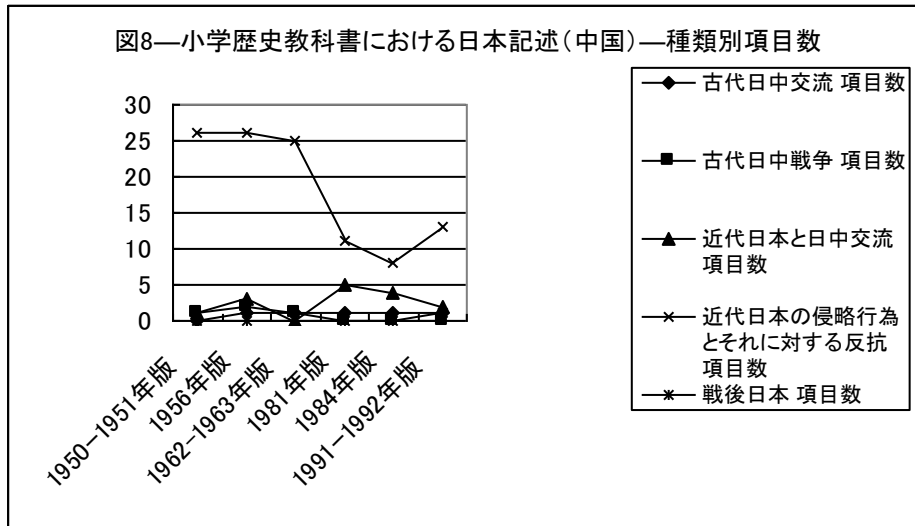
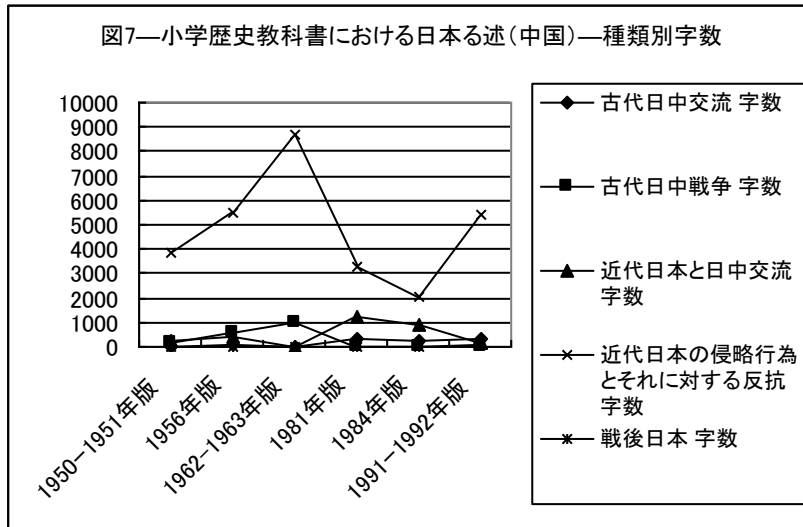
1958年に「大躍進運動」がはじまり、中国共産党中央と政府（国務院）は『教育工作に関する指示』を發布し、「教育はプロレタリア階級政治に奉仕しなければならない、教育は必ず労働生産と結合しなければならない」という教育方針を提起した。歴史教育については、「今を重視し、昔を軽視して、プロレタリア階級を隆盛に導き、ブルジョア階級を消滅させる」という方針に転向するよう指示した<sup>29</sup>。その後も60年代初期までに、教育方針を繰り返し変更し、全国各地の教育現場では同時に何種類の教科書も使用するようになった。ここでは、小学の1962—63年版、中学60年版と63—65年版、そして高校の60年版の教科書について検討しておこう。

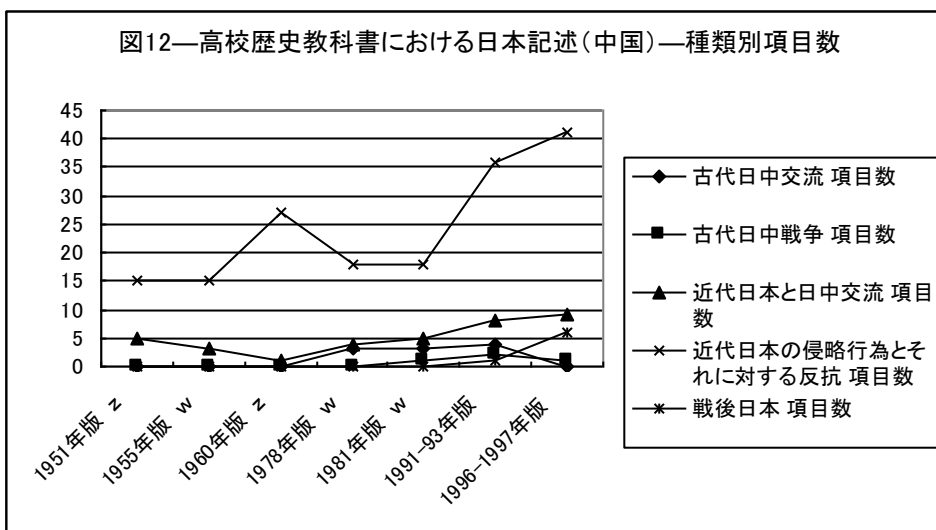
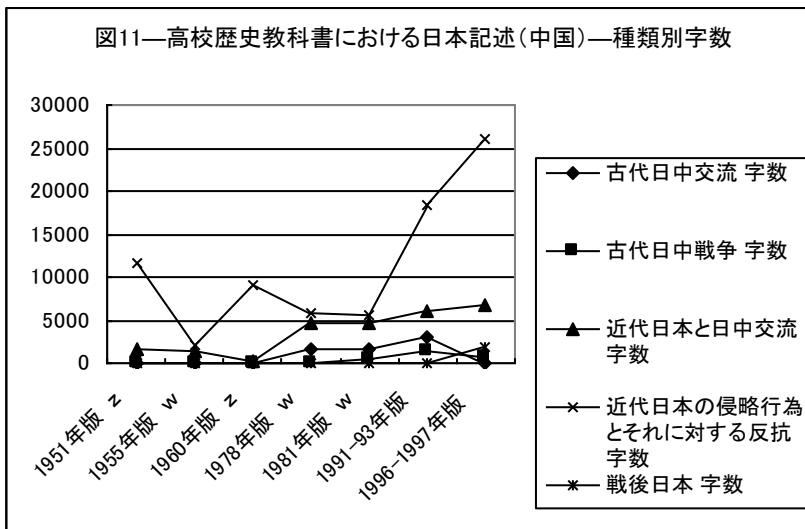
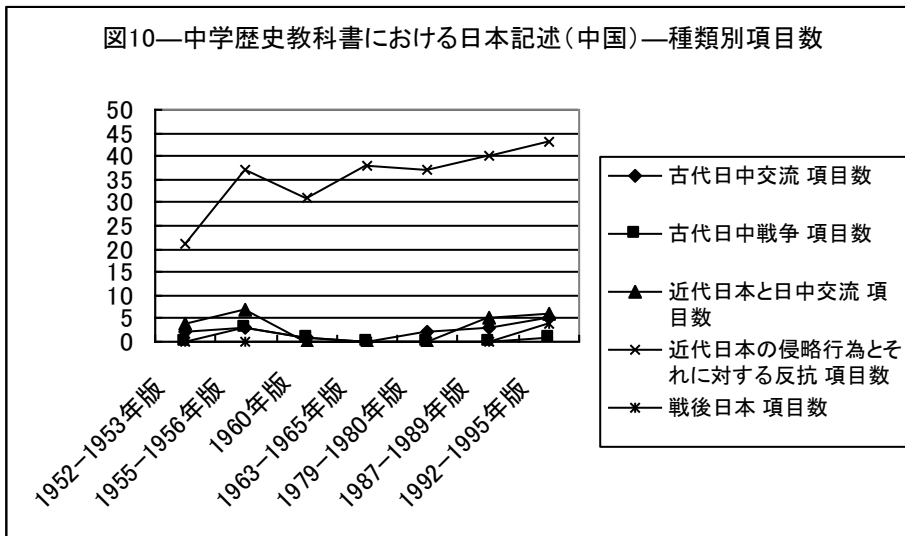


この時期の歴史教科書では、対日記述の総字数は小、中、高等学校いずれにおいても1950年代中期の教科書より多くなっている。とくに60年代初期の教科書は、いずれも近代史の部分が急増した。小学校では古代史の部分が対日記述全体の10.3%にすぎず、中学では古代史が全体の4.7%を占めるようになったしかもわずかな古代史の部分についても、中日間の摩擦への言及がほとんどである(図4、図5、図6)。古代における中日交流についても、記述は極めてわずかであった。さらに、63—65年版の中学歴史教科書に書かれた対日記述



は、近代日本の侵略行為とそれに対する反抗についてのものがすべてであった。高校の教科書では近代史が中心で、対日記述が日本と友好的な日中交流の部分はずか2.9%に減少





した(図 6)。具体的な記述では日本のアジアでの侵略<sup>30</sup>や植民地統治などについてより詳しく説明し、日本による残虐的な行為についても言及するようになった。とくに、この時期

に初めて中学校と高校の教科書において「南京大虐殺」の内容記述が教科書に登場するようになった。

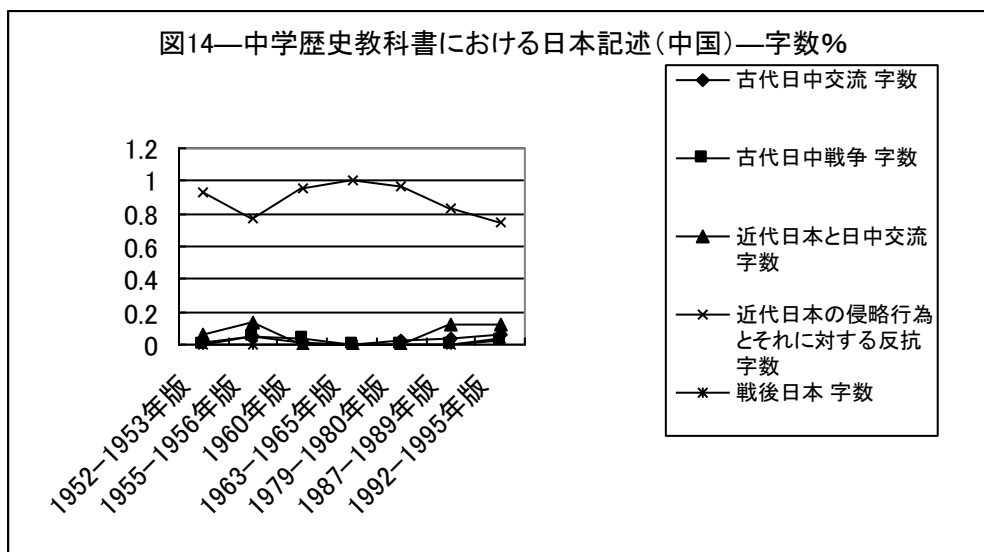
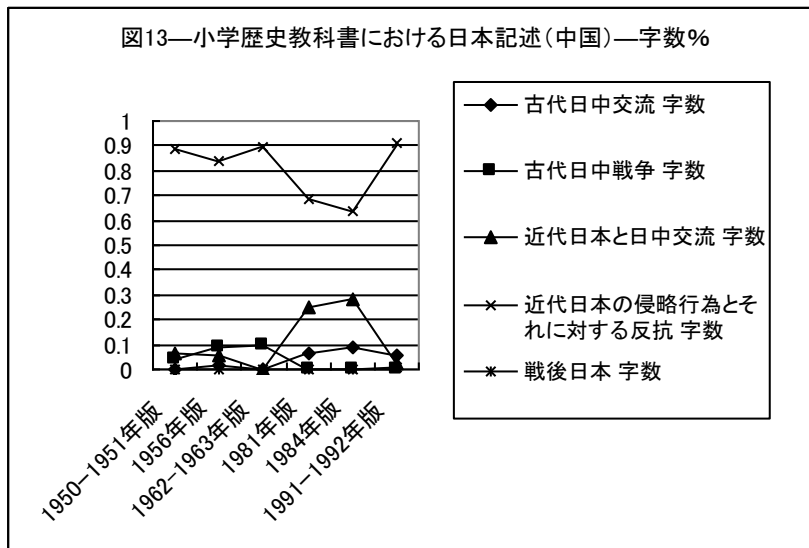
1960年代の教科書において、対日記述のトーンが非常に厳しくなったのは、国内における文革を予感させるような政治運動の激化、対外面での中ソ関係の一層の悪化、中印国境紛争などの要因の他に、60年代初期の日米安保条約改訂などを背景に、池田政府をはじめとする対日批判・非難が激化したこととも影響しているように思われる。

1966年からは文化大革命（文革）がはじまり、66年から70年代初期まで中国の学校の歴史の授業が廃止されたため、教科書もまた出版されなかった。

## 第2節 国交正常化後の歴史教育（72-89年）

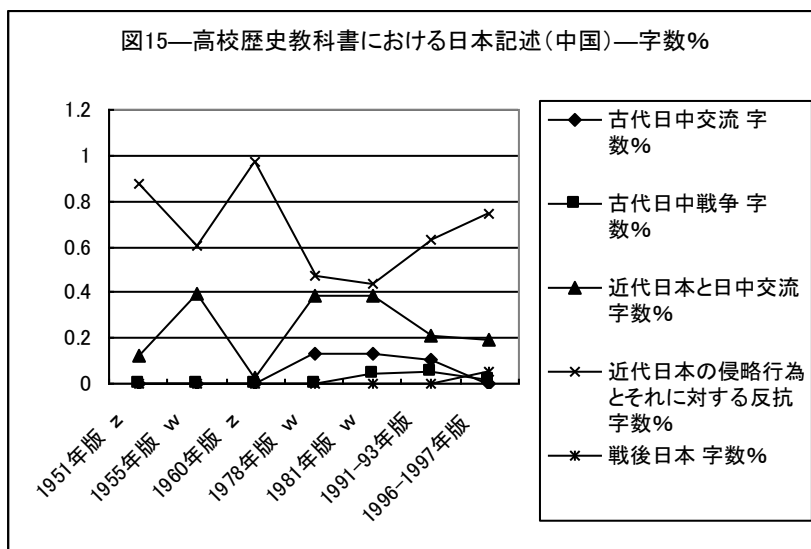
1976年に文革の終了宣言がだされ、78年には新しい『歴史教学大綱』が發布され、教科書が再び編纂されるようになった。文革直後の歴史教科書では対日記述の総字数については、小学校と中学校では60年代の教科書と比べてかなり減少したが、高校の教科書においては若干増加の傾向がみられた。

文革後の教科書における対日記述について興味深いのは、多様化している点である（図4、5、6）。近代史だけではなく、古代史についての記述も多くなり、とくに古代史の部分で中日間の友好交流が強調され、古代の中日間の戦争はいずれの教科書でも言及されなくなっ



たのである。

近代史に関する対日記述は、近代日本による侵略と中国側の抗日にかんする記述が全体に占める割合が減少し、近代日本との友好交流の割合が増加している(図 13、15)。中学校においても同様に、侵略と抵抗にかんする記述の量的な減少がみられる。内容的にも、日本との戦争を総合的に説明するようになった。たとえば、第 2 次世界大戦の背景を紹介する部分では、1930 年代の日本国内での経済危機などに言及したうえで、日本の軍国主義政権の形成過程を紹介しているのである<sup>31</sup>。



中学校においては、近代日本の侵略と中国側の抗日の記述には若干の減少がみられ、記述のトーンも柔らかくなる傾向がみられる。たとえば、1960 年代の教科書では、第 2 次世界大戦時の日本軍を言及するときに、「日寇」という感情的な単語を使用していたが、文革後の教科書では、「日本軍」と表現するようになっている。

1981 年に小、中学校の 12 年制度が回復し、12 年制教育にもとづく「歴史教学大綱」が發布された。同年秋から、新しい教科書の編集も開始された。この教科書は授業時間などの調整をしたのみで、全体的に大きな変化はみられなかった。とくに日本に関する記述の総字数が前回の教科書に比べて若干減少した中で、戦争に関する記述の字数はいずれの教科書でも減少した。とくに中学歴史教科書においては近代日本の侵略行為と抗日の字数は減ったにもかかわらず、項目数が逆に増加した(図 9、10)。近代日本や日中戦争を多面的に紹介していることと関連があるように思われる。たとえば、第 1 次世界大戦の背景として、明治維新後の日本経済の発展などがはじめて記述されているのである。

以上の分析を要約すれば、1972 年 9 月の日中国交正常化後、中国の国定歴史教科書における対日記述は全体的に少なくなり、とくに古代と近代双方の項目で日本とアジア諸国間の摩擦への言及が少なくなり、使われている言葉も感情的な表現が減少し、古代から近代まで幅広く日本を紹介するようになったと言えるであろう。

### 第 3 節 江沢民政権時期の歴史教育 (90-99 年)

1990 年 3 月に、国家教育委員会は「現行普通高中教学計画の調整にかんする意見」を發布し、高校の教育計画、8 科目の「教学大綱」と教科書の改訂を指示した。改訂には歴史科も含まれており、歴史科の授業時間数の増加、歴史教育の重視姿勢が示めされた<sup>32</sup>。91 年には新しい「教学大綱」が作成され、91 年から 93 年と 95 年から 97 年の 2 回にわたって、高校の歴史教科書が出版された。92 年からは「9 年義務教育各科教学大綱」にしたがって編集された教科書が、全国的に実験的に使用されるようになった。

1990 年代の教育制度改革の中で、歴史教科書における対日記述にも大きな変化がみられ

るようになった。変化の一つは総字数の変化である。90年代に人民教育出版社が編集した小、中、高等学校の歴史教科書では、いずれも対日記述は80年代よりも大幅に増加した。これは、日中戦争時期における中国人の反抗精神や抗日愛国戦争の歴史を重視すると同時に、日本という外国との関係をこれまで以上に重視するようになったことと関係しているように思われる。内容からみても、90年代の中国の歴史教科書に現れた日本像は、かつての侵略国というだけでなく、より複雑になっている。

近代日本の侵略行為と抗日の記述は、小学、中学、高校の教科書いずれでも字数が急増している。これは対日記述の総字数が増加したことと関係があるが、90年代の教科書が近代日本との戦争をより多く言及するようになったからである(図7、9、11)。また、小学校と高校の近代日本の侵略行為と抗日にかんする記述についても、全体に占める割合が急上昇した(図13、15)。さらに、内容的にも日本の侵略行為の残虐さを厳しく言及するようになった。例えば、95年版の『全日制普通高校中学教科書—世界近代現代史—上冊』では「日本の帝国主義への移行と朝鮮、中国に対する侵略」と名づけた節を設け、6頁を用いて1880年からの日本の経済発展と20世紀初期までの朝鮮、中国に対する侵略や日露戦争などについて細かく紹介し、甲午(日清)戦争中の日本軍による旅順大虐殺についても絵付きで言及された。

しかし、これだけでは90年代の中国歴史教科書では日本批判が中心になったとは言えない。90年代の歴史教科書にはいずれでも「古代の日中交流」、「古代の日中戦争」、「近代の日本と日中交流」、「近代日本の侵略行為とそれに対する反抗」と「戦後日本」それぞれについての言及が掲載されている(図4、5、6)。また、近代日本の侵略と抗日の記述が字数では増加したが、全体での割合は逆に減少しているのである(図14)。対日記述については、侵略や抗日以外の記述が増加しており、対日記述がより多面的になったと言えるのである。戦後日本についても、90年代になって初めて歴史教科書に登場するようになった。日中国交正常化や戦後日本の経済成長なども、はじめて紹介されるのである<sup>33</sup>。とくに、この時期に初めて夏目漱石などの作家が書いた日本の文学作品<sup>34</sup>が、「世界史」ではじめて紹介されるようになったのである。

以上の検討から、1990年代には中国歴史教科書に書かれた対日記述が多様化したことが明らかになる。近代日本の侵略と抗日にかんする厳しい記述があるとともに、古代の日本や戦後日本の状況についても詳しく紹介されるようになった。つまり90年代の歴史教科書に描かれた日本像は一様ではなく、一つに批判すべき近代におけるアジア・中国に対する残虐な侵略行為の日本であり、いま一つに肯定し学ぶべき日中友好の歴史と戦後に高度成長する日本である。前者については従来の対日批判を継承するとともに、89年の天安門事件後の国際的孤立化状況の中で「愛国主義教育」による国家・国民統合の建て直しを図らなければならなかった事情がある。後者については、国家の最優先課題としての経済発展を追求する際に、日本の経済大国化を導いた経験と日本の協力を重視する中国側の対日重視姿勢が反映している。

#### 第4節 歴史教科書以外の教科書に見る対日記述

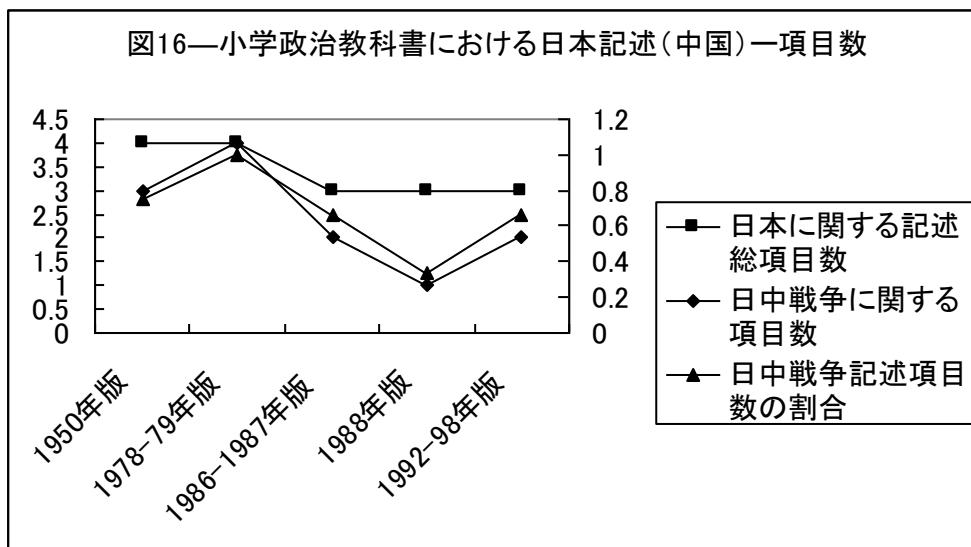
##### 1. 政治

中国の学校教育では、思想政治教育は非常に重要な地位を占めている。愛国教育の中心は政治の授業である。政治の授業は「中国及び世界各国の政治制度」や「正しい政治思想」などを教え、政治情勢などの変化が最も反映されやすい。政治科目の授業名もときどきに変化する。たとえば、小学校の政治科目は1970年代までは「政治」とされたが、80年代以後「思想品德」と変更された。中学校と高校においては変更がさらに多い。

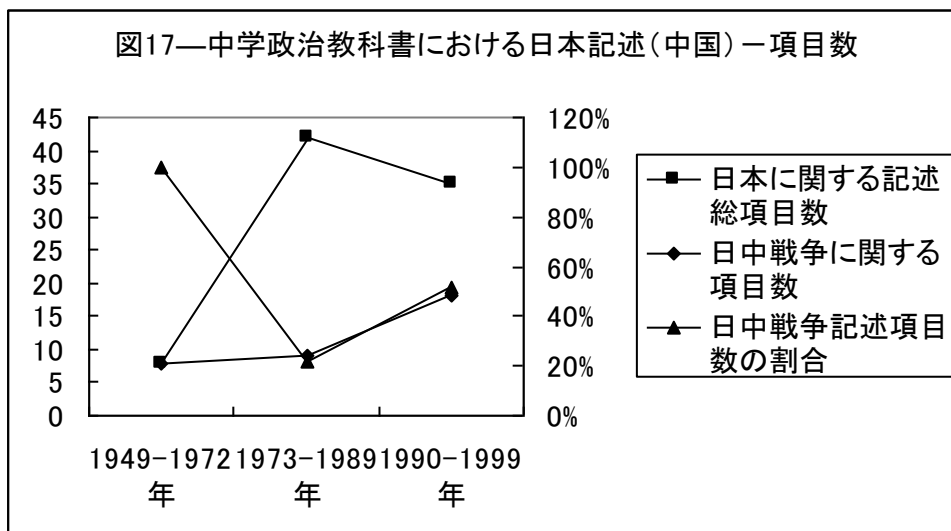
政治教科書で日本がどう描かれ、対日記述が時代によってどのような変化がみられるのか。小学の授業内容からみてみよう。

小学の政治教科書における対日記述は基本的に「物語」の形であり、抗日の物語や、日中のバレーボール・チームの試合などが記述される。小学校の教科書では対日記述は量的

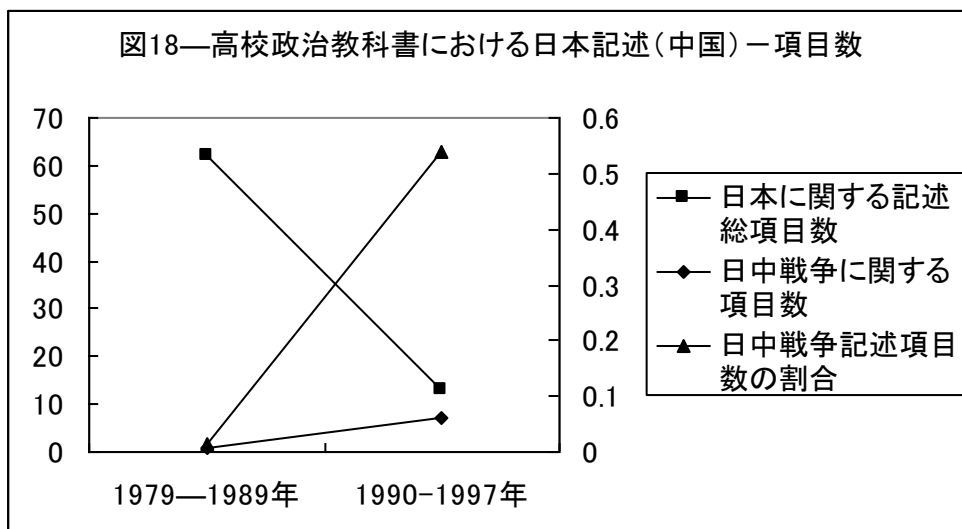
に非常に少なく、総項目数には変化があまりない。ただし日中戦争についての記述の割合には変化がみられる。図 16 に示したように、1970 年代までに対日記述のほとんどが抗日の物語であったのに対し、80 年代に入ると、抗日の物語のほかに、孫文の日本亡命やバレーボールの試合などの「物語」が多くなり、日中戦争の割合が急減少している。ところが 90 年代に入ると、また第 2 次世界大戦時の子どもの抗日物語が登場するようになった。



中学の政治教科書での対日記述は、ある主題を説明するための例として登場する機会が多い。1950、60 年代の教科書では、対日記述の項目は非常に少なく、しかもすべて抗日戦争に関するものであった。しかし、78 年から 89 年では対日記述は大幅に増加したが、日中戦争にかんする記述項目数にあまり大きな変化はみられない (図 17)。この時期の政治教科書に多く見られるのは、日本の戦後経済発展の経験<sup>35</sup>や戦後日本人の生活<sup>36</sup>などである。



1979-89 年の高校政治教科書における対日記述は、日本の政治制度<sup>37</sup>、経済状況<sup>38</sup>、教育<sup>39</sup>、社会福祉制度<sup>40</sup>、環境問題<sup>41</sup>などを幅広く紹介し、日中戦争についての記述は一項目に留まり、内容も「満州事件」後の国連の反応についてのみであった。しかし、90 年代に入ってからは、再び抗日戦争時の英雄の物語や、「二十一条要求」などの日中戦争の内容について言及するようになった。この時期には、対日記述は複雑化し、戦争記述が多くなったにもかかわらず、戦後の日中関係や、日本の中国発展への協力<sup>42</sup>なども記述されるようになった (図 18)。

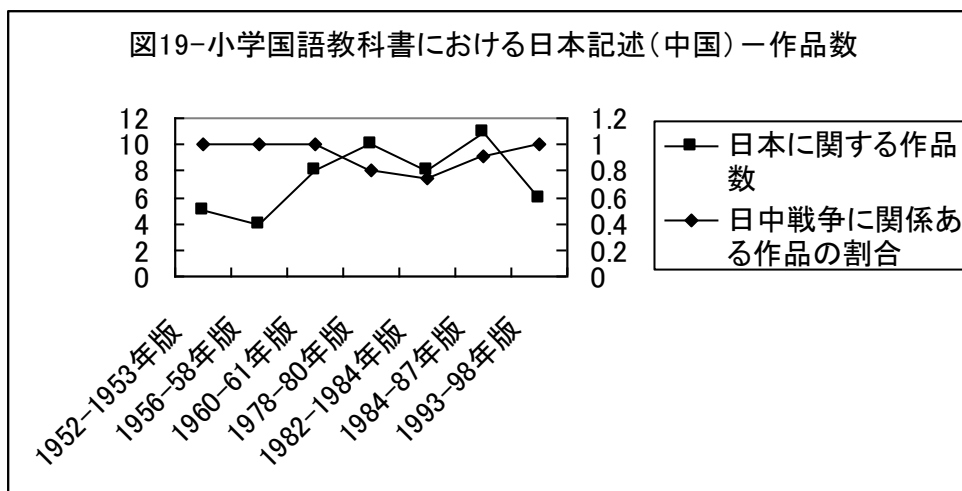


## 2. 国語

中国において日本の国語に相当するのは「語文」であり、小学1年から高校3年まで行われる。中国の「教育大綱」によれば、国語の教育を通して、学生の「社会主義道徳、健康且つ崇高な審美能力と愛国主義精神を養成し、社会主義の自覚を高める」ことが期待されている<sup>43</sup>。

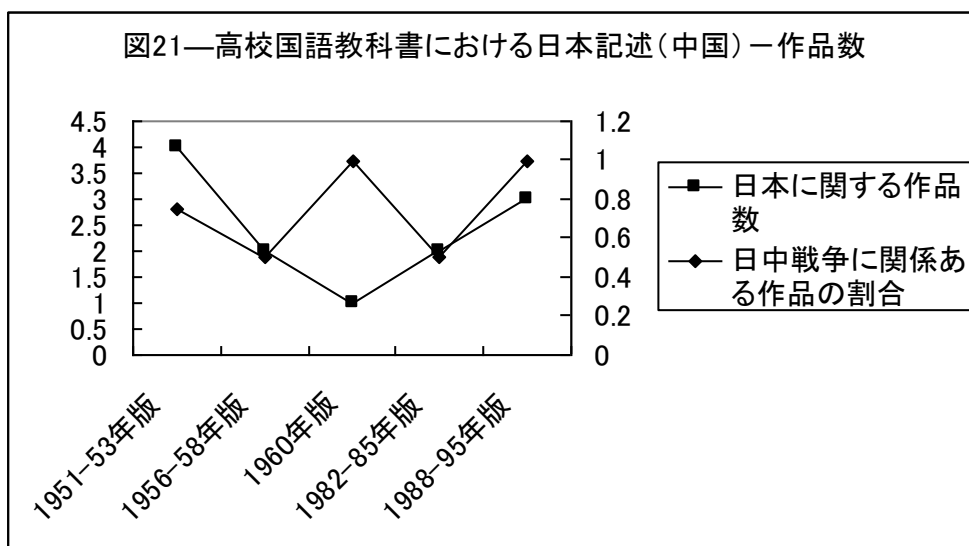
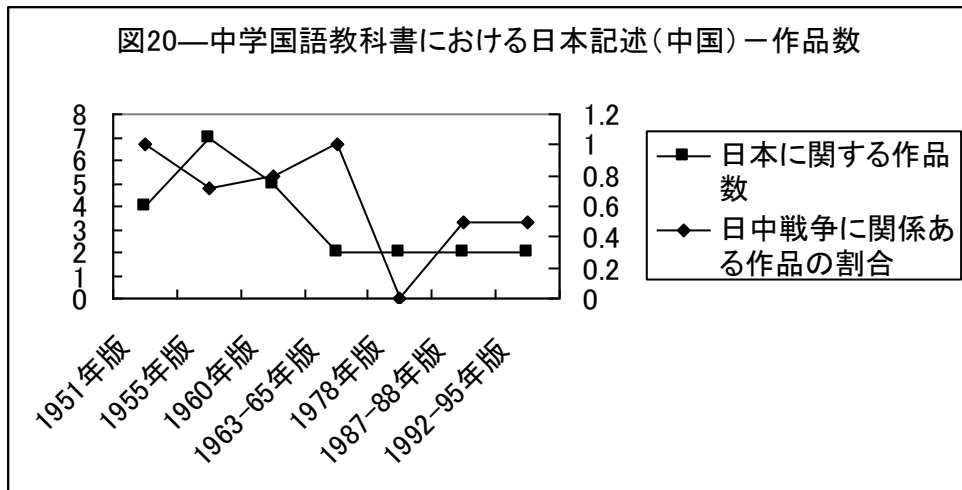
国語の教科書において、日本と関連する文学作品のほか、日本の作家による作品を紹介する形で対日記述がみられる。小学校の国語教科書の対日記述では、物語の多くは抗日の勇敢な物語であるか、抗日を表現する詩などである。また、日中戦争以外の作品は小学教科書において二つ取り上げられている。一つに日本の小学生による「大倉先生」という作文で、小学校の先生を描くものであり、いま一つは魯迅による「仙台において」という文章である。

中学と高校の国語教科書にある日本に関係ある作品の数は小学校のそれに比べ少ないが、内容的に中学と高校では同じ作品を勉強することも多いようである(図19、図20、図21)。中学と高校では日本侵略への反抗や戦時における日本企業の経済搾取などのほかに、魯迅の日本留学時代の日本人先生を描く「藤野先生」や、日本共産党員の小林多喜二による「母親」と氷心が戦後日本に訪問した時の花見と日中友好を描く「桜花賛」の作品がとり上げられている。



70、80年代の教科書の日本に関する作品数は比較的が多いが、日中戦争に関係する作品

の割合は低下している（図 19、20、21）。他方で 50、60 年代と 90 年代の小学国語教科書では戦争に関係ある作品の割合が高い。これも、第 1 節から第 3 節まで歴史教科書の日本記述の変化と同じような傾向がみられる。日中関係がおかれた時代環境を反映したものである。



### 3. 社会

1992年に中国国家教育委員会は「9年義務教育小学社会教学大綱」を制定し、小学校で新しい科目の「社会」を設定し、小学用の教科書6冊を編集した。これらは、93年に小学校用の教科書として使用され始めた。

社会教科書における対日記述は第4冊の自国史と第6冊の世界史及び世界各国の紹介の中で触れた。社会教科書では近代における日中戦争について簡単に記述されるほか、現代の日本の社会習慣や、経済状況などの状況を詳しく説明したものになっている。とくに、第6冊の世界各国の状況について紹介する部分において、冒頭で日本を紹介し、アジア諸国の中で紹介されたのは日本と東南アジアだけであり、7頁をかけて日本の状況を詳しく説明している。アメリカにかんする紹介は7番目で、同じく7頁であった。すなわち90年代の社会教科書において、特に小学教育において日本は重要な地位に置かれていると言えるのである。



## 第5節 中国の教科書にみる対日認識の変化

第1節から第4節までの分析から、中国の教科書における対日記述について、1950年代以降一貫して日中戦争や抗日（日本の侵略に対する中国人の抵抗）についての記述が多いことが明らかとなった。しかし同時に、時代の変化によって、日本についての記述にも変化が見られたことも明らかである。

1949年から71年の時期において、歴史、政治、国語の教科書に書かれた対日記述はほとんどが近代の日本による侵略行為と抗日であった。もちろん古代史や文学作品を通じた対日記述もあったが、基本的に対日記述は厳しい姿勢を貫いている。その背景には、中華人民共和国建国後、日中戦争が終わって間もないこともあり、戦後の日本政府は台湾の中華民国政府と国交を維持し、中国と国交がない状態にあったことと言える。

1972年から89年の時期には、対日記述から戦争関連が量的に減少した。戦争以外に古代の日中交流や、戦後の日中友好など、さまざまな面から総合的に日本を記述するようになった。とくに注目すべきは、この時期の政治教科書に日本の経済発展の経験や戦後日本の経済、社会、教育状況などが紹介されるようになったことである。全体的に言えば、この時期に対日記述がもっとも均衡のとれたものになっていたと言えるであろう。

1990年代の対日記述はやや複雑である。対日記述では戦争関連が量的かつ比率的にも多くなり、70や80年代よりも日本に厳しい姿勢が維持されている。ただし歴史教科書でも古代から戦後まで総合的に日本を記述する傾向は維持され、他の教科書においても現代の「平和の日本」も紹介されている。しかし、戦後日本の歩みについて詳しくは説明されていないために、戦争中の残虐な日本と現在の先進国である日本の二つの側面を学生たちに矛盾なく理解させることが難しく、むしろ不可解な日本との印象を学生に与えかねない。

## 第三章 台湾の教科書に見られる日本

台湾は1895年から1945年まで50年間、日本の植民統治下におかれ、1945年の日本敗戦後、国民政府の支配下に置かれて、50年余が経過した。49年に国民党政権は中国での内戦に敗れて台湾に撤退し、それ以後台湾を統治してきた。72年に日本と中華人民共和国は国交正常化を実現し、台湾と日本は断交した。国民党政権は1937年から日本との8年間の抗日戦争の経験があり、台湾では日本の植民地支配の記憶も消えていない。こうした背景の下で、台湾における学校教育で日本を如何に教えているのか、時代の変化によってその記述に変化がみられるのか。50年来の台湾の小、中、高等学校の「歴史」、「社会」、「国語」、「認識台湾」などの教科書の内容を分析してみよう。

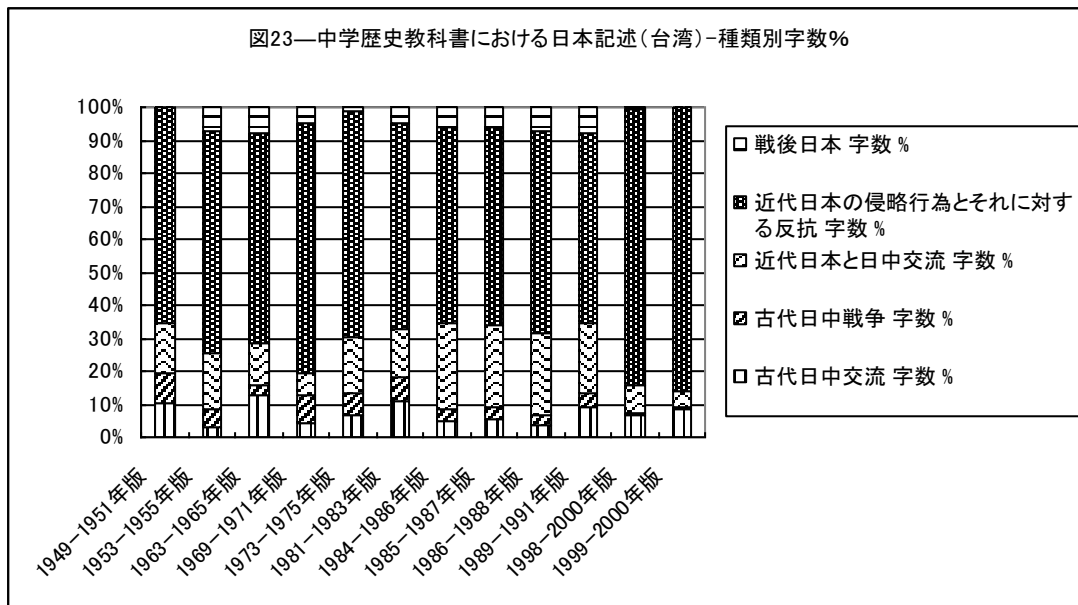
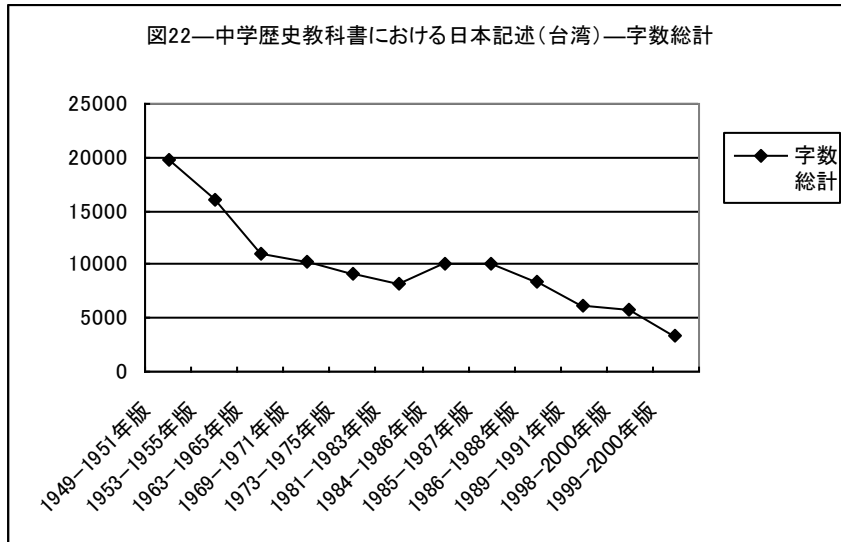
### 第1節 友好関係を重視する歴史教育（49-71年）

台湾の歴史科目は中学と高校に設置されており、小学校では歴史の授業がないため、本稿では中学と高校の歴史教科書についてのみ分析する。1949年に国民党政権が台湾に移転したが、中学の歴史教科書は大陸で国民党政権が使用した教科書を台湾でも採用し、最近まで歴史教育の「自国史」は中国全土の歴史を教えることであった。このため、歴史教科書に書かれた対日記述には古代の日中交流から近代の日中戦争など、中国大陸の教科書の内容と類似する部分が多い。

国民党政権が台湾に撤退した後、1949年から51年にかけて中学の歴史教科書を編集し、出版した。49年から51年の教科書は基本的に教育部がなお全国を統治していた48年に制定し「中学課程標準」にもとづいて編集されたものであるため、抗日戦争の内容が多く、全体的に対日記述の量も多い（図22、23）。

ただし1949年から51年版の中学歴史教科書はその後の教科書と比べると、戦後日本についての記述がないことが目立つ（図23）。この時期の教科書における近代日本の侵略行為とそれに対する抵抗の部分は量的に多くなく、また、明治維新後の日本のアジア侵略など国民政府成立前についてほとんど記述されなかった。しかし、教科書の対日記述で強調されているのは第2次世界大戦時を中心とする20世紀前半の日本のアジア侵略と国民党の抵

抗である。例えば、「九一八事変」は 4 頁を用いて詳しく説明し、「太平洋戦争」について二冊の教科書にわたって合計 9 頁も記述した。日本のアジア侵略について、厳しい姿勢が示されているといえよう。



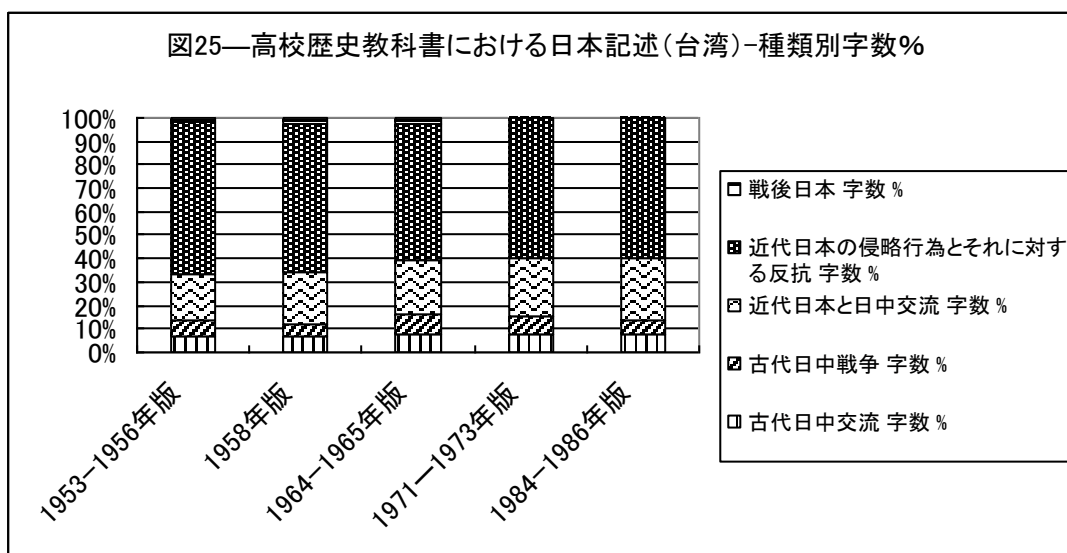
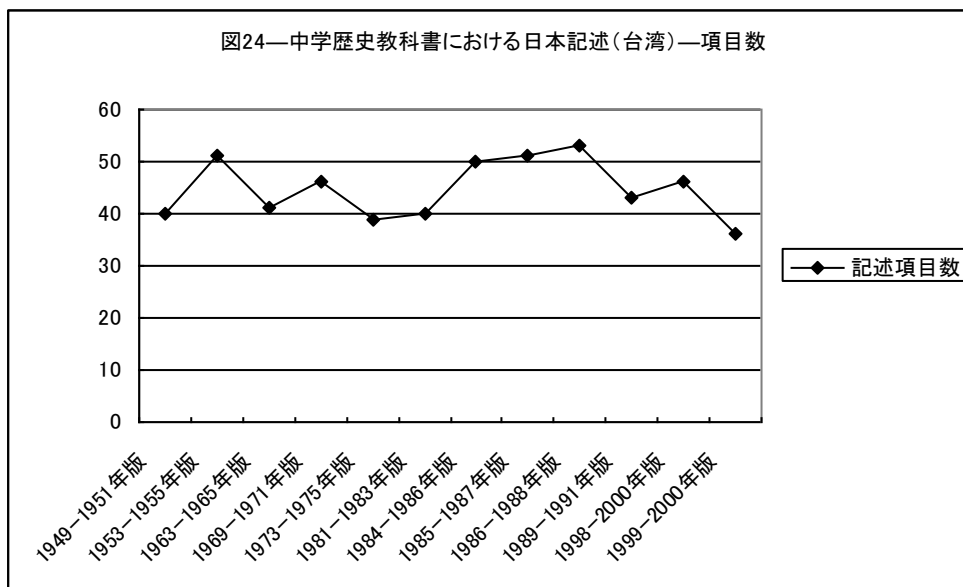
国民政府は台湾に移転後、「共産主義を抵抗し、国を救う」国策をとっていたこともあるため、1952年に新しい『課程標準』を改訂し、したがって、53年から新しい「課程標準」のもとで、歴史教科書が編集し始められた。

1953年から55年の中学歴史教科書では、対日記述の字数が減少したが、対日記述の項目数が逆に増加した(図22、24)。また、中学校と高校の教科書では、ともに古代史から戦後日本の戦後処理まで幅広く書かれたようになった(図23、25)。とく近代日本の対外侵略と抗日の記述については、各項目で減少した。このことは、49年に国民政府が台湾に移転して、日本との外交関係を重視した姿勢と関係あるのかも知れない。

1955年に台湾では高校の「課程標準」が改定され、58年に高校の歴史教科書が編集された。58年版の高校教科書の対日記述は、字数および項目数双方ともに減少したが(図26、27)、種類別割合もほとんど変化しなかった(図25)。

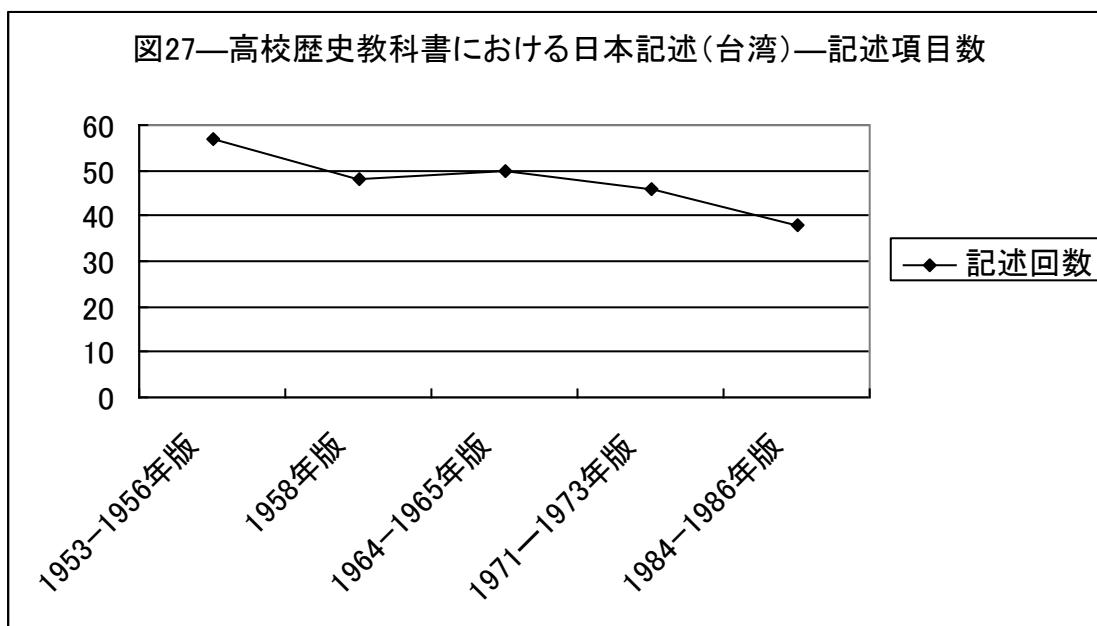
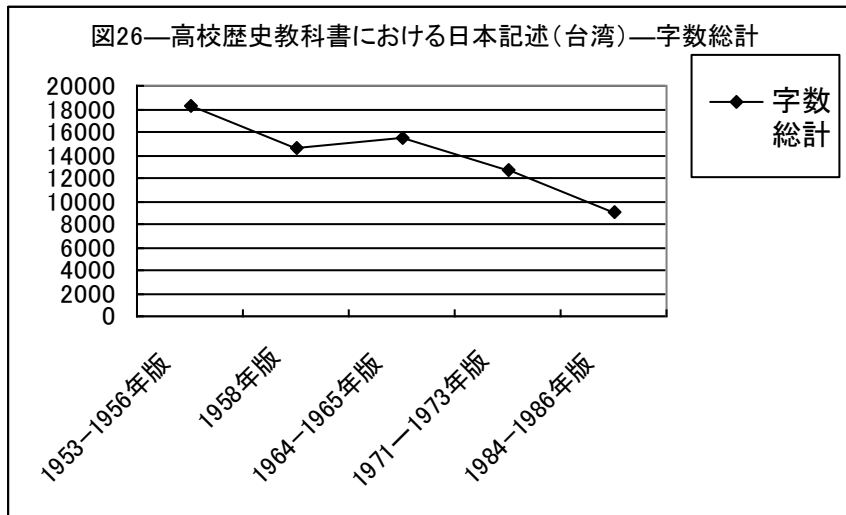
1962年に台湾の教育部は中学と高校の全科目に対して「改訂課程標準」を發布し、63年

から 65 年まで歴史教科書の改訂が進められた。この教科書改訂の特徴は「民族精神教育の強化」であり、「道徳教育と工芸教育」を重視する姿勢を示した。63-65 年版の歴史教科書における対日記述は中学校では字数が引き続き大幅に減少したが、高校ではあまり変化がない。しかし、内容を検討してみると、中学教科書における対日記述の割合は、近代日本の侵略及び交流についての記述がどちらも減少した一方で、古代日中交流に関する記述の割合がかなり上昇した (図 28)。高校においては、近代日本の侵略と抗日及び古代における日中戦争に関する記述は若干減少し、近代日本と日中交流の記述は増加した (図 29)。とくに明治維新前後の欧米による日本への「侵入」に関する項目について、他の時期の教科書と比べて大きく強調している<sup>44</sup>。この時期の教科書の対日記述には、やや柔軟な姿勢が見られる。それは、60 年代における経済的関係の強化などに象徴される良好な日台関係を反映していると言ってよいだろう。



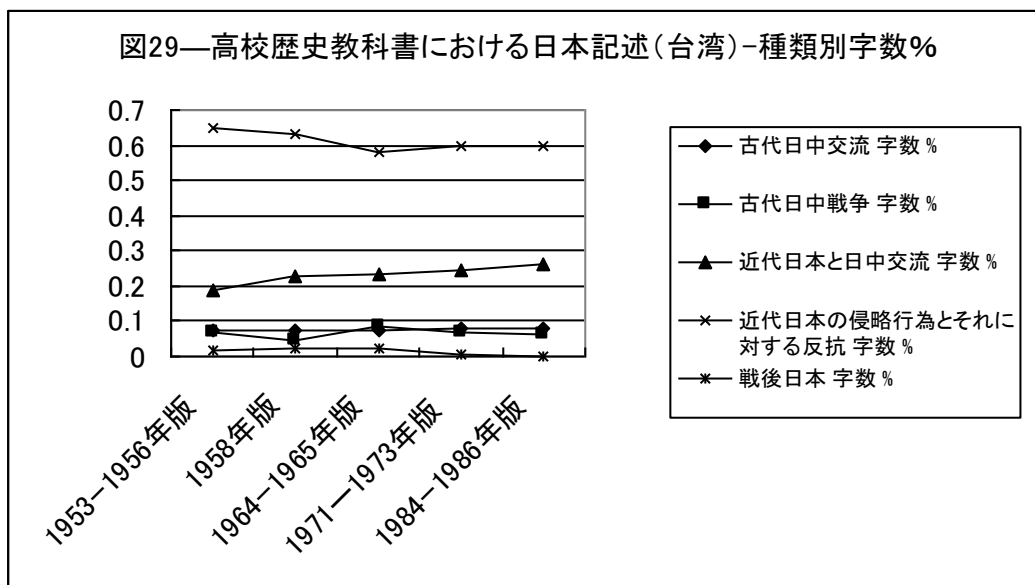
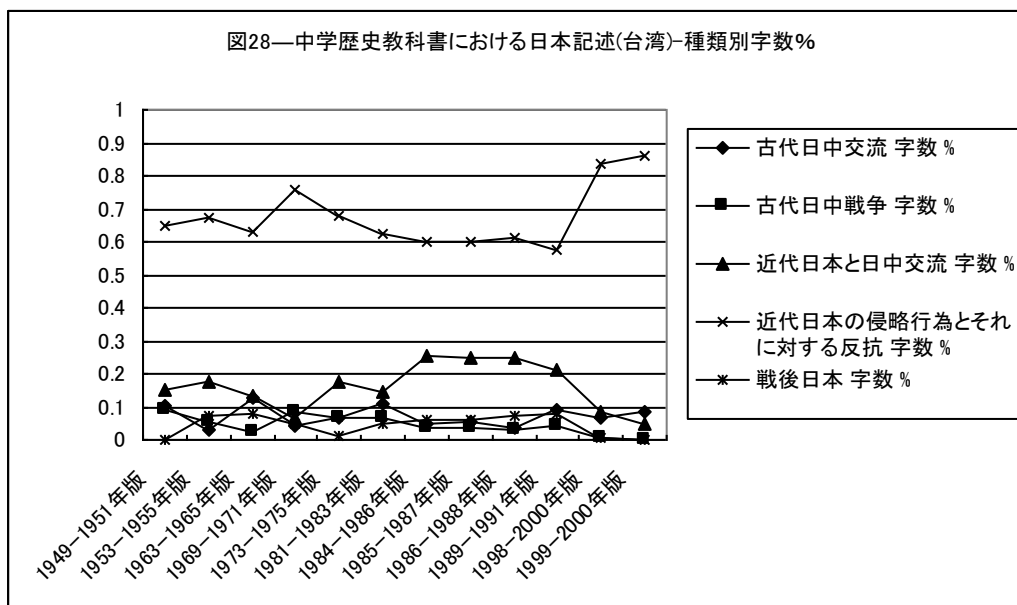
1967 年に、蒋介石総統は「9 年義務教育」の実施を発表し、同時に 9 年義務教育に適する『国民中学暫行課程標準』が教育部において改訂され、68 年 1 月に公布された。68 年の『中学課程標準』には『公民と道徳』、『国語』、『歴史』、『地理』及び『音楽』、『美術』、『体育』などの科目教育を通して、「学生の愛国心、公德心と国家社会への責任感を養成し、学生に国家を愛し、同胞を愛し、みなと仲良くでき、責任感を持ち、ルールを守り、十分に

中華民族の道徳文化を表現でき、正々堂々とした中国を構築すること」を明記している<sup>45</sup>。このような方針の下で、69年から71年の間に9年義務教育に対応した中学歴史教科書が編集された。



69—71年版の中学歴史教科書では、対日記述の総字数が若干減少した。また、対日記述の姿勢には大きな変化が見られる。古代と近代の日中戦争と抗日にかんする字数の割合が大きく上昇し、逆に古代と近代の日本、日中交流と戦後日本にかんする記述の割合が大きく減少した。具体的な内容について、たとえば明治維新後の日本の琉球、朝鮮に対する侵略は第3冊と第5冊の自国史と世界史に二回記述され、内容的にもそれ以前の中学歴史教科書の記述に比べて詳しくなった<sup>46</sup>。

台湾の教科書について、1949年から71年までは対日記述が全体的に減少する傾向があった。内戦直後の教科書の対日記述は戦争について厳しい姿勢を貫いたが、その後には柔軟な姿勢がみられるようになった。60年代以降の対日記述は、再び厳しいものとなった。こうした台湾の教科書における対日記述の変化は、台湾が直面する多くの国が中国大陸と接近する傾向が見られる国際環境及び対日関係によってもたらされたのであろう。



## 第2節 国交断絶後の歴史教育 (72-87年)

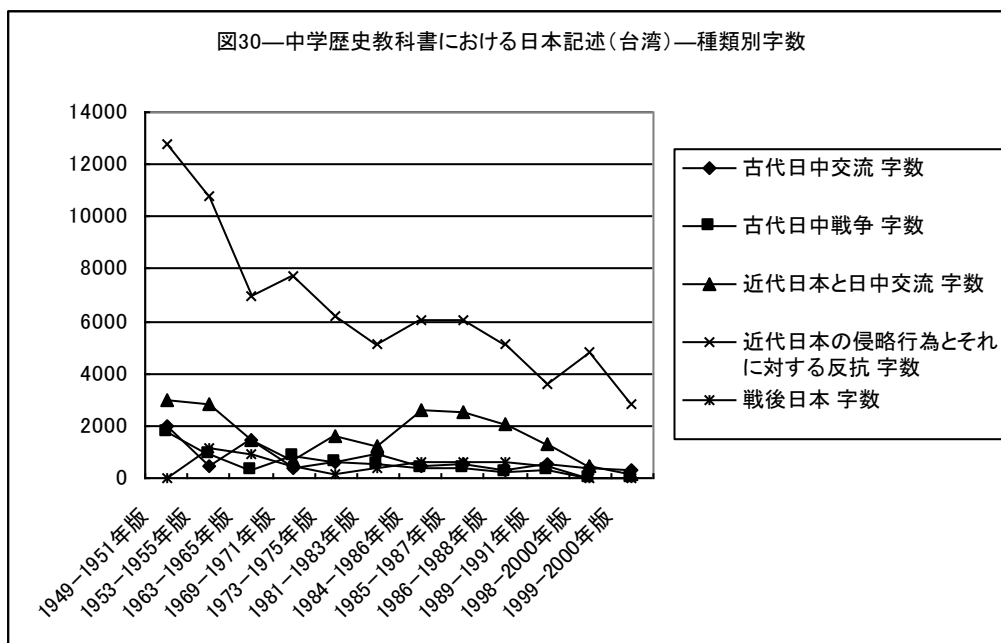
1971年に、中学で9年義務教育制が開始した後、高校についても『高校課程標準』を改訂した。「民族精神及び民族道徳教育を強化する」ことが謳われたほか、歴史科においては「青年に民族復興の責任を啓発し、学生に民族の伝統精神を認識させ、彼らの国家復興の抱負を啓発する」<sup>47</sup>ことが目的とされた。この『高校課程標準』に沿って、71-73年に高校の歴史教科書が編集された。

71-73年版の高校歴史教科書は、総字数が引き続き大きく減少した。減少は9年義務教育を実行後、学生の負担を減少する方針に沿ったものである。字数のほかに、内容的にも若干変化が見られ、近代にかんする対日記述の割合が若干増加した一方で、古代日本や戦後の日本についてはやや減少している。そこには「民族精神教育を強化する」方針の下で強調された近代史教育重視の姿勢がみられる。」

中学では、72年には、『改訂後の国民中学課程標準』が發布された。72年版の『中学課程標準』は愛国をとくに強調し、「四育<sup>48</sup>の均衡発展を重視する」ことになった<sup>49</sup>。この『課程

標準』の下で、73年から75年までの間に中学の歴史教科書は再編纂された。73—75年版の中学歴史教科書における対日記述は、総字数が従来と同様に減少する傾向が見られる。しかし、内容については複雑化している。すなわち、古代の部分には前とあまり変わりが無いが、近代日本については日本の侵略と抗日の記述の割合がかなり減少し、近代日中交流の記述の割合が大きく増加した(図23、28)。近代史については、日本について柔軟な記述がみられる。しかし、「南京大虐殺」を初めて中学の教科書に記述するようになるなど、厳しい対日姿勢もみられ、また、戦後日本についての記述は戦後各国の対日講和条約だけであり<sup>50</sup>、戦後の国民党政府による対日政策についての記述も姿を消した。

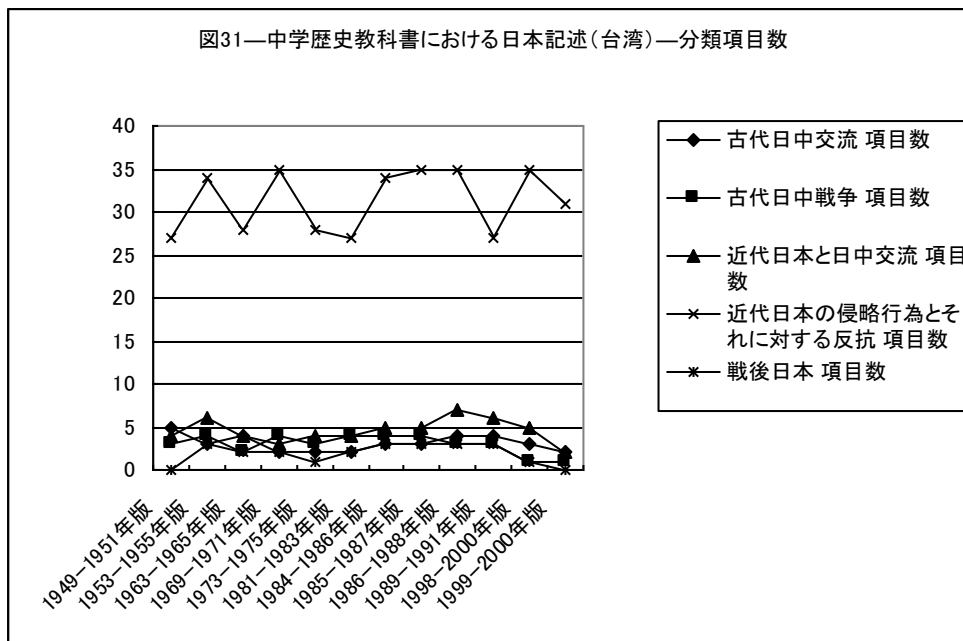
1981年—83年には、中学の歴史教科書が改編された。この版の教科書は総字数と近代日本の侵略行為と抗日にかんする記述はともに大幅に減少したが、日本の侵略行為と抗日の項目数にはほとんど変化がなかった(図22、30)。また、81—83年版の中学歴史教科書の抗日戦争時における国民党政府の軍隊による正面戦場の戦役については記述が少なくなり、長沙会戦や湘北会戦など大戦役についての言及も姿を消した。国民党政府の功績を強調する姿勢が抑制されたと言える。



1983年にはまた、中学と高校について同時に『課程標準』が改訂された。今回の修訂は基本的に教育改革が目的である。83年版の『中学課程標準』の下で、84年から91年にかけて4回にわたって教科書が改訂された。84年—86年と85年—87年に改訂された教科書の対日記述はほとんど変わりがなく、86年—88年に編集した教科書は字数に若干減少したものの、記述内容にはあまり変化が見られなかった。特に近代史において、戦争にかんする記述の比率は少なくなり、交流の部分が多くなった。古代史部分は字数がさほど変化していないが、項目数の上昇が目される(図30、31)。対日記述は、より幅広いものとなったのである。いま一つ注目すべきは、70年代までの中学歴史教科書でほとんど言及されなかった日本の台湾侵略と台湾人民の反抗が83年以降の教科書にサブタイトルをつけて記述する<sup>51</sup>ようになり、「台湾史」を重視するようになったことである。

高校では新しい『課程標準』にもとづいて、1984年から86年までの間に歴史教科書が作られ、90年代まで高校で使用された。84年—86年版の高校歴史教科書では引き続き対日記述の字数が減少した。内容構成は以前の教科書とあまり変化がなく、具体的な項目についての記述は簡略化し、とくに抗日戦争時の具体的な戦役にかんする説明が大幅に減少した。また注目すべきは、84年—86年版の教科書において戦後日本についての記述がなくなったことである。代わって、86年に新しく設定された世界文化史の教科書に対日記述が

現れたが、それは戦後日本の国際地位とその発展の要因についてであった。



以上の検討から、1972年から87年までの台湾における中学と高校の歴史教科書の対日記述には若干の変化がみられるが、変化は対日認識そのものというよりも学生の負担減などの教育方針の変更によるものであった。このことはむしろ、この時期の台湾における教科書及び教育に対する政治の影響が下降したことを示していると言える。

### 第3節 李登輝政権時期の歴史教育 (1988-2000年)

前述したように、1989年から91年までに中学の歴史教科書は83年の『中学課程標準』にもとづいて、改訂された。89年-91年版の教科書は改訂によって、全体的に記述が簡略化し、その影響を受けて対日記述の字数も大きく減少した。しかし、内容の比率にはあまり変化がみられない。各項目についての記述はさらに縮小する傾向が見られ、例えば以前はかなりの紙数が割かれていた「南京大虐殺」は他の戦役とともに簡単に記述されるようになった<sup>52</sup>。また、近代日本については批判だけではなく、清時代末期の中国人による日本留学が中国の近代化に良い影響<sup>53</sup>を与えたとの肯定的な記述も見られる。また、この時期になって初めて、70年代初期の台湾の国連脱退と日中国交正常化による台湾への影響<sup>54</sup>が記述されるようになった。

1994年には、中学の『課程標準』が修正された。修正を受けて、98年から中学歴史教科書の試用本の1-4冊と正式本の1-3冊<sup>55</sup>が編集された。1998年-2000年版と1999年-2000年版教科書は内容的に大きな違いがない(図22、23、24、28、30、31)<sup>56</sup>。

90年代末の中学の歴史教科書では記述がますます簡略化し、多くの記述は写真を添付しており、生き生きとした史実を表現するようになった。日本についての記述は、近代における日中摩擦の部分の割合がかなり増加し、近代の日中交流や古代日本と戦後日本の記述は大幅に減少した(図28)。とくに戦後の日本についてはAPECを紹介する際に触れただけで、基本的に戦後日本についての具体的な内容が記述されなくなった。このように対日記述は厳しくなった面もあるが、抗日戦争における具体的な戦役や日本の植民地統治などに対する批判的な記述もより簡略化されるようになり、史実だけ述べるといった柔軟な面もみられる<sup>57</sup>。

1988年から2000年までの台湾の中学と高校の歴史教科書には80年代と同様な変化が若干みられるが、多くは教育改革の結果としての変化であり、政治面によってはさほど影響されなかったと言えるだろう。しかし、対日記述は全体的にみれば、やはり近代日本につ

いての記述が多く、「自国史」は中国史を記述しており、日本の対中侵略や抗日がいずれの時期の歴史教科書でも絶対多数を占めている。

#### 第4節 『認識台湾』に現れた台湾の新しい日本認識

1949年以來、台湾における自国にかんする教育は中国全土を念頭に行われてきたが、97年に台湾自身を念頭において、『認識台湾』の歴史篇、社会篇、地理篇の三冊が試用本として採用された。『認識台湾』は中学で新しく設定された科目であり、歴史、社会、地理の授業から独立しており、歴史、社会、地理の授業は従来通り中国大陆についての知識の取得を目指したものである。

『認識台湾－歴史篇』の歴史時代は「中国史」と関係なく、先史時代、国際競争時代、鄭氏統治時代、清朝領有時代前期、清朝領有時代後期、日本植民統治時代及び中華民国統治時代の七つに区分されている。台湾が中国大陆から独立した地域として教科書が作成されたのである。この7つの時代区分の中で、先史を除く6つの時代で日本に言及している。清朝領有時代の後期までにおいては、対日記述は豊臣秀吉による明朝征伐と台湾での戦争、そして16世紀末の日本による琉球・台湾侵略以外はすべて貿易交流である。

日本による植民統治時代の対日評価については、新しい評価がみられる。1980年代の歴史教科書では甲午（日清）戦争以後の植民地統治時の日本政府による虐殺、経済略奪や台湾青年に対する高等教育の差別政策など<sup>58</sup>が強調されていたが、『認識台湾』に書かれた記述には大きな変化がみられたのである。

『認識台湾－歴史篇』の日本植民統治時代は第7章と第8章あわせて6節をかけて記述された。第7章は「台湾の抗日運動」、「植民政治とコントロール」、「植民的な経済発展」の3つで構成される。「台湾の抗日運動」の項目では、とくに台湾人民の勇敢な抗日運動が賞賛され、抗日運動ごとに日本植民地政府が鎮圧したと記述され、毎回の死者数が紹介された<sup>59</sup>が、具体的な殺害状況については言及されなかった。『認識台湾』教科書は写真と絵が多用されているが、たとえば抗日義勇軍の家族が刑具をつけられて見せしめにされた場面、西来庵抗日事件で逮捕された人が裁判に送られる写真と霧社事件における抗日リーダーの写真などの6葉である<sup>60</sup>。歴史教科書のように、虐殺の絵などを用いて生々しい虐殺現場を表現する絵と写真とはレベルが違う。むしろ、日本植民地統治の残酷さを強調することを避けているように思われる。

第2節の政治統制にかんする記述は、総督専制の統治体制と警察政治の統治方法や権限を箇条書きで簡単に記述し、植民地人民に対する統制を強化する保甲制度が実施されたとして批判するのは一般的であったが、『認識台湾』では「保甲の主要任務は戸籍を調査し、出入りを監視し、伝染病の予防、交通の整備、義務労働などである」と事実紹介に徹している。また「総督府は保甲を利用して、昔からの習慣である纏足や辮髪（べんぱつ）の撤廃、日本語の普及、風俗改良、迷信の排除などを進め、さらに農業改革にも保甲制度が有意義であった」と肯定的に記述するようになった。ただし、皇民化政策については否定的に記述されている。

第3節のタイトルは「植民地経済の発展」であり、日本による植民統治が台湾の経済発展に貢献したことを肯定的に評価した。土地制度の改革や金融制度の整備、交通の整備、人口調査などの制度の整備や、農業改革、工業化などへの日本統治の貢献を認め、日本統治の農業改革によって台湾が世界で糖業王国の一つになり、工業化の結果として台湾が半農業半工業社会になった<sup>61</sup>と評価したのである。

第8章のタイトルは「日本植民統治時代の教育、学術及び社会」であり、植民時代の教育や社会の発展について記述している。台湾での学校の増設や日本語の普及などが紹介されている。とくに日本語の普及が台湾近代化に大きく貢献したことを賞賛し、義務教育実施などの政策が入学率の上昇に大きく影響したことなど、植民統治を肯定している。また、植民地時代の人口激増、昔からの習慣である纏足や辮髪（べんぱつ）の撤廃の普及、時間・法律を守る観念の養成や衛生観念の成立などを紹介し、植民統治を肯定的に評価している。最後の項目



で政治改革への台湾民衆の要求に言及し、親日派の林献堂の「台湾議会」設立の要求を中心に説明した<sup>62</sup>。全体的に、日本植民統治時期の日本統治にかんする記述みれば、肯定的な記述が大多数であり、否定的な記述は限定されており、厳しく批判することを避けているように思われる。

中華民国統治時代の対日記述は、日本によるは敗戦にともなう植民統治の放棄と日中国交正常化の台湾への影響についてのみである。とくに「2・28 事件」などの中華民国統治の失策について厳しく評価することで、間接的に日本植民統治時代の良さが暗示されている。

以上の分析から、韓国と同じように日本の植民地になった台湾であるが、その歴史と社会的変化を記述した教科書、『認識台湾』に描かれた日本は批判がきわめて少なく、中国の清時代の統治と現代の国民党統治とバランスをとって評価されている。『認識台湾』から抽出される台湾の対日認識は、90 年代の台湾民衆の日本に対する親近感を反映していると言えるかもしれない。

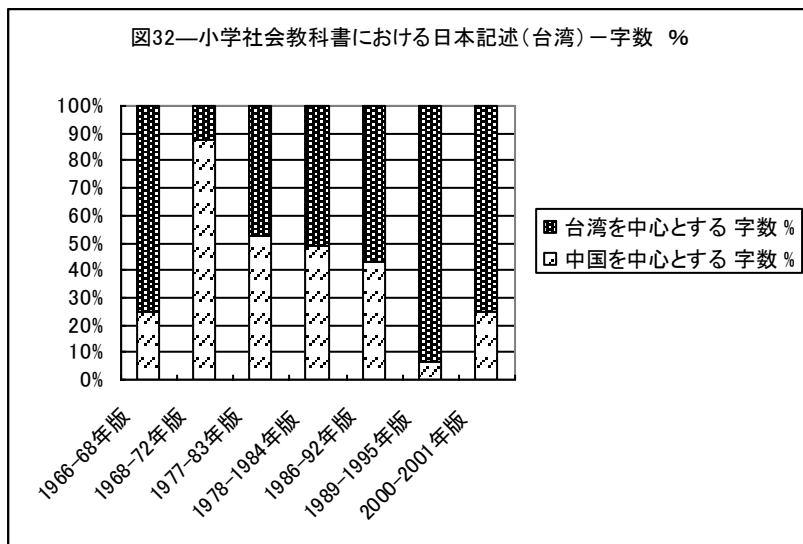
### 第5節 歴史教科書以外の教科書に見る対日記述

台湾の教科書における対日記述は歴史教科書が中心であるが、社会と国語の教科書においても量的には多くはないが、日本への言及もみられる。

#### 1. 社会

社会は台湾の小学で開設されている授業であり、歴史、地理、道徳などを総合的に講義する授業である。社会科教科書が統一教科書として、はじめて国立編訳館が編纂・発行したのは 1966 年である。

1966-68 年版の社会教科書は 63-65 年版の台湾省国民学校教師研習会に編集された暫定本を基礎に国立編訳館が編集したが、暫定本と同じく台湾の内容を中心とした。対日記述は、当時の蒋介石総統と国民政府の功績を賞賛する 2 つの文章を除き、すべて台湾に対する日本の侵略と台湾人民の抵抗を説明する内容であった。ただし、対日記述そのものが相対的に少なかった。

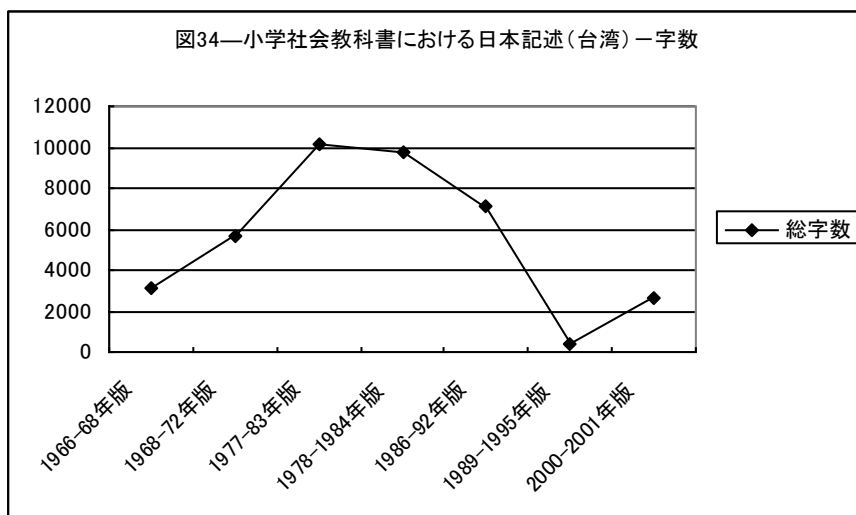
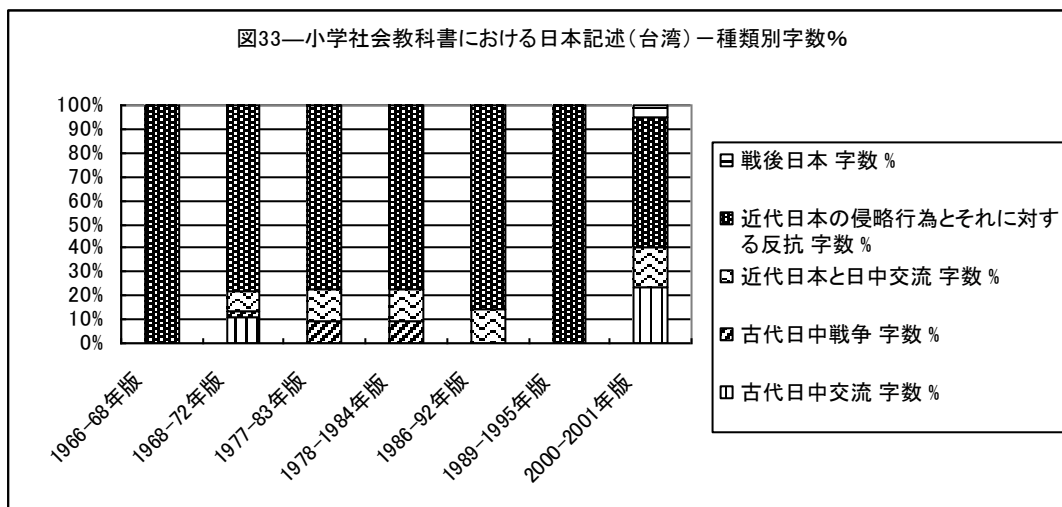


1968 年から 72 年に、68 年版の『小学課程標準』に沿って、社会教科書は全面的に改訂された。68-72 年版の社会教科書の編集要旨には「日常生活の問題を出発点とし、児童に正々堂々たる中国人に育てることを目的とする」<sup>63</sup>とあり、民族精神教育が中心的地位を占めている。そ台湾を中心とした 66-68 年版の教科書と比べて、中国を主題する記述が全体の 24.6%から 87.6%に上昇している。その内容は歴史教科書のように古代史から近代史まで幅広く扱っているが、近代日本の侵略と抗日の記述が大きな部分を占めた。とくに、抗

日戦争のいくつかの大きな会戦や南京大虐殺を含め、詳細に戦争について記述し、日本に対してかなり厳しい姿勢を示していた。

1975年に台湾の『小学課程標準』は改訂され、その直後の77—83年と78—84年に試用本と正式本がそれぞれ出版された。この版の社会教科書では対日記述は、量的に大幅に増加した(図34)。しかし内容は近代が中心となり、近代日本と日中交流についても多く言及するようになった(図33)。また、台湾と日本の関係についての記述はこの時期に再び増加する傾向がみられ、台湾史が重視され、対日記述も台湾での侵略と植民政策を中心としたものになった。とくに「近代日本の侵略」と「日中戦争」についての記述も、同様の出来事が自国史と世界史の部分に重複記述され、日本を厳しく批判する姿勢は変わっていない。

1986—92年に社会教科書は再度修訂されたものの、記述の内容に大きな変化はみられなかったが、古代の日中関係にかんする記述が消えて、近代史だけの記述となった。



1988年に李登輝政権が成立した後、社会教科書にも大きな変化がみられるようになった。89—95年に出版された社会教科書では対日記述が量的にきわめて少なくなり、3項目だけとなった。日本による中国大陸での侵略や戦争については一切言及されず、台湾における日本の植民統治についても言及は消えた。89—95年版の社会教科書の中心内容は台湾にかんする事実の紹介となり、中国大陸にかんする記述もほとんどなくなった。89年以降の教科書改訂は、90年代の台湾の若年層における台湾化と対日親近感の促進に影響を及ぼしたかもしれない。

1995年小学の『課程標準』を再度改訂され、社会教科書も2000—2001年に再び編集さ

れた<sup>64</sup>。2000—2001年版の社会教科書は89—95年版と同じく台湾についての記述が中心となり、日本にかんしては中国大陸での侵略行為の全般について3頁にわたって説明しただけであった。台湾と日本の関係について古代から戦後まで幅広く言及されるようになり、特に戦後の日本の技術移転など、台湾と日本の経済関係が多く言及されるようになった。

## 2. 国語

台湾の国語教育では「民族精神の強化」が目的とされるが、国語教科書における対日記述は、中国大陸と同じく抗日戦争などにかんする作品が多い。1950年代には、国立編訳館が中学と高校の国語教科書を編集し、小学の国語教科書は『課程標準』に沿って他の出版社が編集した教科書が使用された。中学用の国語教科書では53—55年度版で抗日英雄の物語を賞賛する作品、『舍生取義』が選択された。しかし、それ以後の中学教科書に日本にかんする作品は採用されていない。53—54年版の高校国語教科書でも、台湾精神を描く文章に8カ国連合軍の一員としての日本軍の対中侵略についての言及が一行あったのみである。50年代末期と60年代初期の二回修訂された高校国語教科書はともに、日本に言及した一つの作品が紹介されているだけで、しかもそれは反共への協力であった。

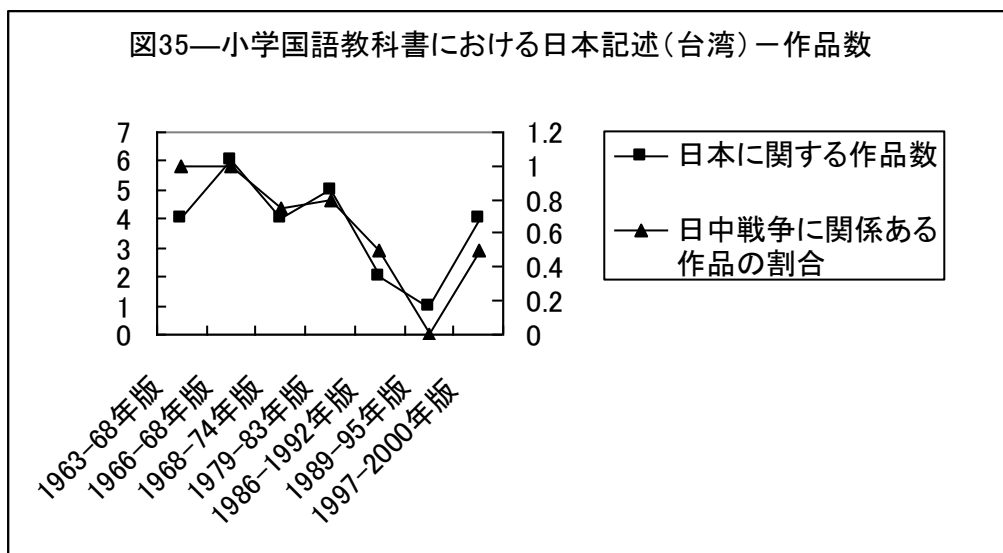


図35は、台湾における小学校の国語教科書の中で日本と関係ある作品数と日中戦争に関係がある作品の割合を表示したものである。60年代には、台湾の小学校国語教科書における対日記述は、国民党政府及び蒋介石総統の抗日活動と台湾での抗日活動に関連したもののみであった。このような小学校の国語教科書における日本に対する厳しい姿勢は、80年代初めまで続いた。しかし、80年代後半には日中戦争を主題とする文章が姿を消した。84—87年版の高校の教科書には一つの文章が抗日の精神を扱っているが、批判的なものは姿を消した。97—2000年版の小学校の国語教科書は社会教科書と同じく、戦争と戦後の日本いずれにも言及しているが、京都の風景や日本の切手などを紹介したものもあった。

国語教科書の対日記述は、戦争の記述でも日本を批判する内容ではなく、民族の抗日精神を強調した。80年代以後の教科書には、むしろ日本に対する柔軟な姿勢がみられるのである。

### 第6節 台湾の教科書に見る対日認識の変化

これまでの分析から、台湾の教科書における対日記述は中国大陸と同じく近代日本による中国を中心としたアジア太平洋地域に対する侵略と抗日が中心となっている。このような傾向は1949年に国民党政府が台湾に撤退したときから、現在まで変わらないが、時代の変遷にともなって、対日記述にも若干の変化もあった。

台湾の教科書は、国民党政府が大陸を統治した時代に採用していた教科書制度に沿って編集された。各科目の教科書における項目の配置はほぼ一貫しており、その意味では安定性を保った教科書とも言えるだろう。これは、各版で大きな変化がみられる中国大陸の教科書と異なる特徴である。

1949年～60年代半ばの台湾の教科書における対日記述は他の時期よりも多いが、記述は柔軟なものであった。49年に国民党政府が台湾に撤退した後、日本を含めた国際関係を重視し、共産主義に抵抗することを最優先の任務にしたからであろう。60年代後半の教科書には、日本に対する厳しい批判的な言及が急増し、全体的に厳しい姿勢がみられた。このような傾向は歴史教科書だけではなく、社会や国語の教科書にも同様にみられた。それは60年代末から国際環境が台湾に厳しくなり、中国大陸を重視する傾向が強まったことで、国民党政府が孤立を懸念して「民族精神の強化」を教育で重視した結果かもしれない。

1972年～87年の時期は、台湾の教科書での対日記述の変化が最も少ない時期だと言える。とくに歴史教科書において、国際関係や政治的な要素による変化がほとんど観察できない。しかし、この時期の社会や国語の教科書には従来と比べ、中国との関係よりも台湾と日本の関係を重視した記述がみられるようになった。

1988年～2000年の時期は、対日記述について歴史教科書ではさほど変化がないが、他の教科書、とくに『認識台湾』の教科書に日本植民統治に対する肯定的な認識をみられるなど、大きな変化が観察された。また社会教科書も台湾が記述の中心となるといった変化がみられた。これは、88年に台湾独立を主張する親日派の李登輝政権が登場したことが反映されたように思われる。また、87年以後に台湾で戒厳令が解除され、本省人と外省人との摩擦が緩和され、中国大陸に反対する新しい政治意識を共有する共同体が形成されはじめた<sup>65</sup>ことも影響があるように思われる。

以上の分析から、台湾の教科書でも時代の変遷によって対日記述に変化がみられるが、大陸の教科書のような大きな変化ではなく、しかも1990年代に入ってから台湾史に力点が置かれ、対日記述が相対的に減少する教科書も現れた。

#### 第四章 中国と台湾の教科書記述の比較

第二章と第三章では、中国と台湾の教科書における対日記述を数量的に分析してきた。本章においては、とくに「南京大虐殺」、「日本の植民統治」と「現在の日本」の三つの事例を通して、中国と台湾の教科書の対日記述を分析してみよう。

##### 第1節 南京大虐殺について

中国では、内戦直後の教科書は「南京大虐殺」について言及していなかった。それに対して、台湾における高校の歴史教科書が一行程度であるが、「12月、南京は陥落してしまい、日本軍は意のままに虐殺してしまい、死者が30万人になった。」と記述していた。台湾における本格的な「南京大虐殺」にかんする記述は、74年版の中学教科書にみられる。「南京大虐殺」という見出し付きで、200字を使って詳しく虐殺の状況を記述した。中国における南京大虐殺についての記述は、1960年版の中学と高校の歴史教科書から現れた。記述内容には、80年代前半まで中国と台湾の記述に大きな違いはなく、ともに大虐殺の悲惨な状況を記述していた(表4)。80年代後半に入ると、兩岸の教科書ともに記述が少なくなり、また内容も残虐さを強調したものは若干減少した。

しかし、90年代に入ると、兩岸の記述に違いがみられるようになった。台湾では、記述は80年代よりもさらに少なくなり、細かい説明がほとんどみられなくなった。これは第三章で指摘したように、90年代の台湾の対日重視の政策と教科書における対日記述の批判的評価の後退に関係があるように思われる。とくに99年と2000年版の中学教科書では、「南京大虐殺」の見出しさえも消え去り、「731部隊」と「慰安婦」の記述はいずれも簡単な記述のみになったのである。

表1—小学歴史教科書に書かれた南京大虐殺(中国、台湾)

中国			台湾		
出版年	内容	字数	出版年	内容	字数
『高級小学歴史課本』 1950-51 年版— 1984年版	なし	0	『国民学校—社会課本』 (暫用 本) 1-4 冊 1966	なし	0
『小学課本—歴史』上、 下冊 1991—92 年版	<p>第11課、<b>日本軍南京大虐殺</b>—</p> <p>1937年、日本帝国主義は芦溝橋事件を發動した以後、又大挙して上海を進攻している。侵略軍はどこへ攻撃に行ったらどこの人民が残忍な虐殺されてしまった。11月に<b>日本侵略軍</b>は上海を占領して、それから南京へ侵犯した。彼らは上海から南京まで一路に焼殺した。<b>日本侵略軍</b>は南京を占領した以後、あえて公然と南京の人民に六週間の長い時間で血生臭い大虐殺を行った。ある日、<b>日本軍</b>は慕府山4か5つの村に拘禁していた中国軍民57,000余りの人を鉄線か縄で二人二人に締めて、彼らに縦に4つの行列をさせて、長江の川端に駆って、<b>日本軍</b>は始めに機関銃で掃射し、死なない人に再び銃剣で死ぬまで突き刺す。後に灯油を掛け、放火して死体を燃やす。罪証を壊滅するために最後に彼らは死骸を全部長江に投入してしまった。もっと<b>日本侵略軍</b>はよく殺人を楽しみにする。例えば<b>日本軍</b>の向井と野田という二人の仕官は殺人を試合で行った。この二人は誰か先に100人を殺したら誰が勝利者になると言っていて、途上で中国人を見ると殺してしまい、南京の紫金山に到着した時、野田は105人を殺した、向井は106人を殺したのに、誰か先に100人を殺しになったことは証明できなから、勝ち負けが付かれないから、すると、150人まで殺すことを目標として約束にした。続いて殺人試合を行って行った。向井は今回の試合は全く「玩弄物」と言った。こんなに人を殺してもまばたき一つしない悪魔はあえて殺人することを面白いことと話したものだ。もう一回、<b>日本軍</b>は一人の中国人を捕まえてきて、まず彼の体にガソリンを掛け、それから銃で射撃すると燃焼を引き、燃やされた人は足掻きまわって万分苦痛しているところ、<b>日本軍</b>は側に立って判断力もなくなって狂気じみに思う存分に拍手し笑っていた。また一回、南京の南門外で何人の<b>日本軍</b>は一人の老人を捕まえてきた、まず縄で老人を木の上へ吊り下げて行って、それから300か400メートルの遠い所へ行って、射撃試合をおこなっていた。彼らは誰か先に縄を射当てたら誰が勝ちになることを約束した。すると、その老人は高いところから落ちてしまって生きながら振り落とされて死んでしまった。ある<b>日本軍</b>は捕まえてきた俘虜を銃南京市で約1/3くらいの建物が<b>日本軍</b>に燃やされてしまった。その時、南京に住んでいたドイツ人は<b>日本軍</b>を「獸類集団」とも称した。下冊P31~34</p>	754	『国民学校—社会』1-8 冊 1968—72年版	<p>民国二十六年12月13日、<b>敵軍</b>は南京に攻め入ってしまい、我が守備軍は部分が包囲を突破した者以外に外の者は全部状烈に正義のために一身を犠牲にしてしまった。<b>敵軍</b>は城内に入ってから大規模に虐殺を行い、遭難して死んだ軍民は<b>10万人</b>以上になり、確かに歴史上の大きな災害になった。 第7冊P62</p>	78
『九年義務教育六年制小学教科書—社会』 1994—98	<b>日本軍</b> は南京を不法に占拠してしまつて、非人間的な <b>南京大虐殺</b> を作つた。第4冊P53	135			

表2—中学歴史教科書に書かれた南京大虐殺(中国、台湾)

中国			台湾		
出版年	内容	字数	出版年	内容	字数
初級中学本国近代史課本下冊、1953年版	なし	0	初級中学歴史6冊、1949年版	なし	0
初級中学中国歴史第4冊、1956年版	なし	0	中学標準教科書初中歴史第4冊、1955年版	なし	0
九年一貫制試用課本歴史第3冊、1960年版	1937年11月、 <b>日本侵略軍</b> は上海を占領し、続いて南京を包囲した。蒋介石は南京を六ヶ月間を守ると述べたものの、結局六日間で陥落した。南京の人民は <b>日寇</b> に非人間的な残虐さきわまる暴行を受けた。けだもののような <b>日寇</b> は一ヶ月余に、我々30万の同胞を殺害し、約二万余の女性に暴行を行い、市内の建物の三分の一が焼かれ、数えられないほどの金品を略奪した。これは <b>日本侵略者</b> が中国人民に残した大きな血の債務である。P111-112	144	中学標準教科書初中歴史第4冊、1964年版	なし	0
十二年制学校初級中学課本中国歴史第4冊、1965年版	1937年11月、 <b>日本侵略軍</b> は上海を占領し、続いて三方から南京を包囲した。南京に駐在した国民党軍は15万人で、 <b>敵軍</b> に包囲されると、すぐにあわただしく撤退した。12月、南京は陥落した。 <b>日本軍</b> は南京を占領してから、狂気じみた大虐殺を行った。南京の平和的住民は射撃練習の標的にされたり、銃剣で果し合いをする対象とされたり、石油をかけられ焼殺されたり、生き埋めにされたり、内臓を取り出されたりする暴行を受けた。一ヶ月余に、殺害された人の数は <b>30万人以上</b> にのぼった。P112-113	153	中学標準教科書初中歴史第3冊、1970年版	なし	0
初級中学課本中国歴史第4冊、1982年版	<b>日本侵略軍</b> は上海を占領し、続いて三方から南京を包囲した。南京に駐在した国民党軍は15万人で、敵軍に包囲されると、すぐにあわただしく撤退した。12月、南京は陥落した。 <b>日本軍</b> は南京を占領してから、狂気じみた <b>大虐殺</b> を行った。南京の平和的住民は射撃練習の標的にされたり、銃剣で果し合いをする対象とされたり、石油をかけられ焼殺されたり、生き埋めにされたり、内臓を取り出されたりする暴行を受けた。調査によると、殺害されたのは総計 <b>30万人余</b> にのぼり、焼き払われた建物は三分の一に達した。そのとき、南京市内は、死体があちこちに置かれ、瓦礫が山ほどあり、寒い風が吹き、人間の地獄になった。敵の凶悪残虐の暴行は全国人民を怒りで燃えあがらせた。P112-113	207	国民中学歴史教科書第3冊、1974年版	民国26年11月、上海が陥落してから、 <b>日寇</b> は西へ進み、12月に南京を攻め落とした。我が国民政府は事前に西の重慶へ移動し、最後まで抵抗すると宣言した。 <b>日本の軍艦</b> は南京を占領してから、狂気じみたけだもののように、血生臭い大虐殺を行い、我が首都の <b>30万</b> の無辜の庶民が <b>日寇</b> の毒手の餌食となり、銃殺されたり、生き埋めされたり、川に捨てられたり、日本刀で首をはねられたりされた。女性は暴行され、財産は全部略奪され、首都は前例のない大災害に遭った。人類の文明史に、最も人道にはずれたページを記した。我が中華民族の耻辱だけではなく、全世界の平和を愛する民族も <b>日寇</b> の蛮行をとくに厳しく非難する。(図1枚)(見出し: <b>南京大虐殺</b> )P94-95	214
初級中学課本中国歴史第3冊、1987年版	12月、南京は攻め落とされた。 <b>日本軍</b> は南京を占領後、南京の人民に六週間のこの世のものと思えないほどの悲惨な血生臭い <b>大虐殺</b> を行い、甚大な罪を犯した。南京の平和的住民は射撃練習の標的にされたり、銃剣で果し合いをする対象とされたり、生き埋めにされたりする暴行を受けた。調査によると、 <b>南京大虐殺</b> で日本軍に殺害された中国人民は <b>30万人余</b> に達した。 <b>日本軍</b> の凶悪残虐の暴行は中国人民を怒りで燃えあがらせた。P112-113	135	国民中学歴史教科書第3冊、1983年版	民国26年11月上海が陥落し、 <b>日本軍</b> は西へ進み、12月に南京を攻め落とした。そのとき政府はすでに武漢に移動し、その後また重慶へ移動し、長期的に抵抗しようとした。 <b>日本軍</b> は南京を占領後、狂気じみたけだもののように、血生臭い大虐殺を行い、財産は全部略奪された。我が首都の <b>30万</b> の無辜な同胞が <b>日本軍</b> の毒手の餌食になり、銃殺されたり、生き埋めされたり、川に捨てられたり、日本刀で首をはねられたりされた。女性が暴行され、最後に死体は火で焼かれた。 <b>日本軍</b> は殺人試合までを行い、理性を失った。このような前例のない野蛮な行為は人類の文明史に、最も人道にはずれたページを記した。我が中華民族の耻辱だけではなく、全世界の正義感のある人々も <b>日寇</b> の蛮行を一緒に厳しく非難する。(図2枚)(見出し: <b>南京大虐殺</b> )P83-85	237
			国民中学歴史教科書第3冊、1985年版、1986年版、1987年版	上海が陥落後、 <b>日本軍</b> はすぐ京滬路及び太湖の南側に沿い進んだ。そして国民政府は正式に首都を重慶へ移ると発表し、10万人の軍隊を南京に駐在させ、主力部隊を西へ撤退させた。民国26年12月、 <b>日本軍</b> は南京を攻め落とし、士官にかつてに略奪、焼殺、強姦させ、殺人試合まで行われた。この世のものと思えないほどの悲惨な血生臭い大虐殺に我が <b>30万</b> の無辜な同胞が殺害された。これは中華民族の不幸だけではなく、人類史上の大きな惨事でもある。(見出し: <b>南京大虐殺</b> の惨劇)p110	145

<p>九年義務教育三年制初級中学教科書中国歴史第4冊、1992年版</p>	<p>1937年12月、<b>日本軍</b>は南京攻め落とした。<b>日本軍</b>は南京を占領後、南京の人民に血生臭い大虐殺を行い、甚大な罪を犯した。南京の平和的な住民は射撃練習の標的にされたり、銃剣で果し合いをする対象とされたり、生き埋めされたりする暴行を受けた。遠東国際法廷の統計によれば、<b>日本軍</b>は南京を占領後六週間以内に武器を持たない中国住民と武器を手放した兵士<b>30万人余</b>を虐殺した。1937年12月15日、武器を手放した中国軍隊と警察隊の人員3000人余は<b>日本軍</b>によって南京漢口門外に護送され、機関銃で射殺された。その後、負傷者は死者と一緒に焼き払われた。16日、中国人難民5000人余は<b>日本軍</b>に集団的に南京中山港に護送され、両手を後ろに縛られ、列に並べられ、機関銃で射殺された後、川に捨てられた。その中で、二人だけが死を逃れた。18日、<b>日本軍</b>は南京幕府山に監禁した57000人余の住民を針金で縛り、下関草靴峡に連行した後、機関銃で射殺した。血の海に生きていた負傷者は皆銃剣で殺された。その中で一人だけが生き残った。最後に、<b>日本軍</b>は死体を全部焼き払った。12月、日本の『東京日日新聞』に「紫金山下」と題する記事は以下のニュースを報道した：<b>日本軍</b>の向井少尉と野田少尉は百人を殺す試合を行い、野田は105人を殺し、向井は106人を殺した。しかし誰が先に100人を殺したのが分からなかったため、勝負が分からず、もう一度先に150人の中国人を殺すことを賭けた。(図3枚)(見出し：<b>南京大虐殺</b>)P51</p>	<p>430</p>	<p>国民中学歴史教科書第3冊、1990年版</p>	<p>上海の陥落後、国民政府は首都を重慶へ移した。26年12月、<b>日本軍</b>は南京を攻め落とし、士官と兵士にかけてに略奪、焼殺、強姦させ、殺人試合まで行われた。この<b>大虐殺</b>に我が無辜な同胞30万人が殺害された。これは中華民族の不幸だけではなく、人類史上の大きな惨事でもある。(見出し：淞滬会戦と<b>南京大虐殺</b>)P78</p>	<p>97</p>
<p>九年義務教育三年制初級中学教科書中国歴史第4冊、1995年版</p>	<p>1937年12月、<b>日本軍</b>は南京攻め落とした。<b>日本軍</b>は南京を占領後、南京の人民に血生臭い<b>大虐殺</b>を行い、甚大な罪を犯した。南京の平和的な住民は射撃練習の標的にされたり、銃剣で果し合いをする対象とされたり、生き埋めされたりする暴行を受けた。遠東国際法廷の統計によれば、<b>日本軍</b>は南京を占領後六週間以内に武器を持たない中国住民と武器を手放した兵士<b>30万人余</b>を虐殺した。1937年12月15日、武器を手放した中国軍隊と警察隊の人員3000人余は<b>日本軍</b>によって南京漢口門外に護送され、機関銃で射殺された。その後、負傷者は死者と一緒に焼き払われた。16日、中国人難民5000人余は<b>日本軍</b>に集団的に南京中山港に護送され、両手を後ろに縛られ、列に並べられ、機関銃で射殺された後、川に捨てられた。その中で、二人だけが死を逃れた。18日、<b>日本軍</b>は南京幕府山に監禁した57000人余の住民を針金で縛り、下関草靴峡に連行した後、機関銃で射殺した。血の海に生きていた負傷者は皆銃剣で殺された。その中で一人だけが生き残った。最後に、<b>日本軍</b>は死体を全部焼き払った。12月、日本の『東京日日新聞』に「紫金山下」と題する記事は以下のニュースを報道した：<b>日本軍</b>の向井少尉と野田少尉は百人を殺す試合を行い、野田は105人を殺し、向井は106人を殺した。しかし誰が先に100人を殺したのが分からなかったため、勝負が分からず、もう一度先に150人の中国人を殺すことを賭けた。(図3枚)(見出し：<b>南京大虐殺</b>)P54-55</p>	<p>430</p>	<p>国民中学歴史教科書第2冊、1999年版、2000年版</p>	<p>十二月中旬、国軍が南京から撤退し、<b>日本軍</b>は南京に入ってから、彼らの野蠻さを発揮し、<b>日本軍</b>に殺害された中国人は<b>三十万以上</b>に達した。<b>南京大虐殺</b>、<b>日本軍</b>「七三一」部隊は東北地方で中国人を細菌戦争の試験に試用した。また韓国、台湾などの女性を「慰安婦」にした。<b>日本軍</b>の中国侵略の重大な罪を十分に表した。P137</p>	<p>110</p>

逆に中国側は小、中、高等学校ともに、非常に長い文章で例をあげ、虐殺の真実性と残酷性を強調した。とくに小学校ではそれまでまったく記述されていなかったにもかかわらず、91—92年版の小学歴史教科書では一つの章を使って、写真付きで「南京大虐殺」の状況を説明したのである。

「南京大虐殺」の一つの大きな争点となった死者数については、兩岸の歴史教科書ともに30万人あるいは30万人以上と記述し、違いがみられない。しかし、台湾の小学校の教科書で一回だけ「南京大虐殺」についてふれた1968—72年版の社会教科書には、「遭難して死亡した軍民は10万人以上になり、確かに歴史上の大きな災害になった」と記述され、

他の台湾の教科書とは矛盾しているのである。

表3—高校歴史教科書に書かれた南京大虐殺(中国、台湾)

中国			台湾		
出版年	内容	字数	出版年	内容	字数
『高級中学課本—世界近代現代史』上、下冊 1956年版	なし	0	『高級中学標準教科書—歴史』1—4冊 1953—56年版	12月、南京は陥落してしまい、 <u>日本軍</u> は意のままに虐殺してしまい、死者が <u>30万人</u> になった。第2冊P309	23
『高級中学課本—中国現代史』全一冊 1960年版	12月13日南京は相手に陥落してしまった。南京で <u>日本侵略軍</u> は平和の住民に非人間的に焼殺淫掠してしまい、1ヶ月余りの間に被害された平和住民は30万人に下らない。P58	64	『高級中学標準教科書—歴史』1—4冊 1958年版	12月、南京は陥落してしまい、 <u>日本軍</u> は意のままに虐殺してしまい、死者が <u>30万人</u> になった。第2冊P223	23
『高級中学課本—世界歴史』上、下冊 1978年版	なし	0	『高級中学標準教科書—歴史』1—4冊 1964—65年版	12月、南京は陥落してしまい、 <u>日本軍</u> は意のままに虐殺してしまい、死者が <u>30万人</u> になった。第2冊P160—162	23
『高級中学課本—世界歴史』上、下冊 1981年版	なし	0	『高級中学標準教科書—歴史』1—4冊 1971—73年版	12月、南京は陥落してしまい、 <u>日本軍</u> は意のままに虐殺してしまい、死者が <u>30万人</u> 。第3冊 P94	24
『高級中学課本—世界歴史』1—2冊 1991年版	なし	0	『高級中学—歴史』1—4冊 1984—86年版	12月12日、南京は陥落してしまい、 <u>日本軍</u> は意のままに我が平民を虐殺してしまい、死者が <u>30万人</u> 。これは <u>南京大虐殺案</u> である。第3冊 P141	34
『高級中学課本—中国歴史』上、下冊 1992—93年版	1937年12月、 <u>日本軍</u> は南京を攻め落としてしまった。国民政府は重慶へ引越し、重慶は戦時副首都になった。 <u>日本軍</u> は南京で残忍苛酷な <u>大虐殺</u> を行った。南京軍民の死亡人数は <u>30万人以上</u> に達した。下冊P33	156	『高級中学—世界文化史』上、下冊 1986—87年版	なし	0
『全日制普通高校中学教科書—中国近代現代史』(試験本)上、下冊 1996—97年版	1937年12月、 <u>日本軍</u> は南京を攻め落としてしまった。国民政府は重慶へ引越し、重慶は戦時副首都になった。 <u>日本軍</u> は南京で残忍苛酷な大虐殺を行った。南京の <u>30万人以上</u> の人が被害された。下冊P33	270			
『全日制普通高校中学教科書—世界近代現代史』上、下冊 1995—96年版	なし	0			

これを要するに、兩岸の教科書はともに「南京大虐殺」を敢行した日本の侵略軍を強く非難しており、記述に大きな相違がみられない。しかし、90年代の中国側のよる踏み込んだ虐殺の強調に対して、台湾側は慎重な評価を維持しており、そこに歴史問題に対する兩岸の態度の相違がみられる。



## 第2節 日本の植民統治について

日本は台湾で50年間の植民統治を行い、中国では東北地方を14年間にわたって支配し、他の占領区でも8年間の植民地統治を行った。日本の植民統治を、兩岸の教科書はどのように認識し、どのように評価しているのだろうか。

日本の植民統治について、中国の小、中、高等学校の歴史教科書はいずれも記述しているが、台湾の教科書は前述した通り、歴史教科書が中国全土の歴史記述を中心とし、日本による台湾統治についての記述は中学校の歴史教科書に少し記述があるのみである。高校の歴史教科書には記述がなく、台湾での植民血統治については主に小学校の社会教科書に記述された。

中国は1950年代後半の教科書から簡単に日本の植民地統治について言及しはじめ、主に「連座」や「植民経済政策」、「植民教育政策」などについて「日本帝国主義は残虐に中国労働者を酷使し、彼らを強制的に東北地方の豊富な鉱産物の採掘に従事させ、軍需工業用の原料を日本の工場へ提供した<sup>66)</sup>」と記述したが、具体的な説明はほとんどなかった。

しかし、1960年に中国では歴史教育の指導方針が転換し、植民統治にかんする記述は中学教科書だけでも従来の223字から1601字までに急増し、内容についてもたとえば50年代の教科書に一行のみで触れた植民経済政策について、詳しく説明した。

「日本帝国主義は占領区において食料配給制度を行い、農民が収穫した食料はすべて敵が指定した場所に運ばせ、一人づつ一ヶ月分の食料だけ残こした。生活用品、たとえば石油、マッチなどについては『配給』制を実施した。日寇の侵略戦争砲火の下で、我が国の経済は前例のない災害を受けた。太平洋戦争開始後、日寇は中国の資源を利用し大規模な罪悪な戦争を支援するために、さらに狂気じみた経済略奪を行なった。工業面では、抗戦初期に破壊された工場は全国工場総数の60%を占め、日本占領区の工業生産はほとんど残っていない。日寇の独占資本は占領区の大部分の鉱工業を略奪した。例えば、東北の工業は完全に日本独占資本にコントロールされ、日本経済システムの一部になった。工業と商業は完全にコントロールされ、侵略戦争のためのものになった。農業面では、日寇が略奪する主要対象は食料及び軍需品である。日寇は様々な野蛮な手段で中国人民の土地を奪い、道路、飛行場、兵営と軍事施設を建設した。日寇の残虐な略奪は占領区の農業生産を次第に衰退させ、耕地面積と食糧生産量をますます減少させた<sup>67)</sup>」。

もちろん、経済政策だけではなく、教育政策や政治統制などについても日本を厳しく批判した。

その後、1963年の改訂から80年代までは、以上のような厳しい対日批判の姿勢がみられず、50年代のように簡単に述べるだけになった。また小学と高校では80年代には植民地統治について記述されず、中学校では説明はわずか113字だけであった。これは前述したように、日中国交正常化後から80年代までの良好な日中関係を反映しているように思われる。

1980年代の日本植民統治への柔軟な記述は、90年代に入ると一変した。中学と高校はいずれも5頁を割いて、写真付きで詳しく植民地統治の様々状況を説明するようになった。とくに具体的な事例をあげて、日本による侵略の残虐性を学生に伝えるようになった。たとえば「植民教育」についてである。

「傀儡満州で、日本語は各級学校の必修科目『国語』に定められ、従来の国語は『漢語』と変更された。学校では中国地図を掛けることを禁じられ、『中華』という単語を使うことも禁止された。日本侵略者はこのような政策を用いて、中国人民の民族意識を抹消しようとして、同化政策を行った。これが奴隷化教育の重要な特徴である。日本は我が国の東北地方を占領した後、すべての学校の停止を命令し、同時にすべての抗日愛国思想と中国歴史、地理、そして関連書籍と教科書を没収し焼却した。1932年3月から7月までの5ヶ月間に焼き払った書籍は、650万冊以上に達した。1932年には東北地方の中小学教師が24000人以上もいたが、1933年には16000人余に減った。瀋陽三中で、日本統治者は一回で愛国教師と学生を35人殺害した<sup>68)</sup>」。

日本の植民統治にかんする中国の教科書の記述は、内容的に柔軟になったり、厳しくなったりすることがあるが、全体的に批判する姿勢に大きな変化はない。ところが、台湾の歴史教科書は中国と異なり、台湾での日本による植民統治にかんする記述は一つの教科書全体でわずか200字前後であり、これにはさほど変化がなかった。80年代に編集した教科書だけが、日本による台湾の植民統治について記述した。

その理由は、国民党政府が台湾に撤退してからも、歴史教育は一貫して中国大陆を中心としたものであり、台湾関連の記述がきわめて少なかったこととも関連している。詳しい台湾事情の説明が掲載されたのは、90年代末期になって刊行された『認識台湾』という教科書が嚆矢であった。これ以外の教科書では、対日記述の内容も大陸と同じく対日批判が中心内容であったが、歴史教科書においては具体的な内容を詳述することはほとんどなかった。

社会教科書では、1960年代から台湾での植民統治が詳しく記述されていた。経済政策についても、中国の教科書と同じく日本批判の色彩が濃厚であった。

「日本が台湾統治の50年間に実施した経済政策は、さらに悪辣であった。彼らは台湾の産業を米、砂糖と樟脳の生産に集中させ、すべての工業製品は日本に依存しなければならなかった。比較的規模が大きい工業、商業はすべて日本人に独占され、儲けた資金はすべて日本に持ち帰った。台湾の米の生産量は毎年増加したが、台湾同胞の米食用量は制限された。台湾全土で道路と港が建築されたが、それはただ製品を日本に運ぶためであった」<sup>69</sup>。

その後、80年代までは記述に大きな変化がなかったが、90年代に入ると記述が急に半分に減少し、詳しい説明もなくなった。さらに注目されるのは、2000—2001年版の社会教科書で日本による台湾植民統治が肯定的に記述されるようになったことである。

「日本人が自己利益にもとづいて台湾で行った植民地政策も、台湾の建設を促進した面も少なくない。たとえば農工業面では、砂糖工場を建て、農作物の新品種を輸入し、化学肥料を試用した。交通建設面では、鉄道、道路、港、飛行場などを建設した。このような建設は台湾の開発を加速し、台湾の現代化も促進した。その他でもたとえば土地の調査、衛生の措置などが台湾の発展に大きく影響した」<sup>70</sup>。

このような日本の植民統治への肯定は、第三章第4節の『認識台湾』の記述にもみられ、中国の教科書とは大きく異なっている。

### 第3節 現在の日本について

台湾の教科書において、戦後日本にかんする記述は対日戦後処理が中心であった。1950年代の歴史教科書から、すでにサンフランシスコ講和条約と日華平和条約の成立過程が詳述された。

「日本だけがこのように寛大に処置され、そのうえ、米国と『安保条約』を結び、米国は日本の安全を保障し、日本が繁栄に復帰することを支援した。敗戦国がこのような待遇が享受できたのは、ソ連の野心があるからである<sup>71</sup>」。

こうした記述には台湾側の対日戦後処理に対する不満が示唆されている。

1970年代まで、台湾の教科書には戦後処理以外には対日記述はなかった。戦後の日本の発展などについては80年代からであり、『世界文化史』は戦後日本経済が世界強国にまで成長できた原因として、米国の援助や低い国防費など5つの要因を指摘し、戦後日本の経済、文化の発展状況を幅広く紹介した。しかし、このような紹介は、『世界文化史』のみであった。

中国側の教科書は台湾と比べれば、1980年代まで歴史教科書では戦後日本についてサンフランシスコ講和会議を含めてまったく言及しなかったと言える。しかし90年代に入ると、戦後処理から戦後の日本の経済発展などについても詳しく説明するようになった。たとえば、95—96年版の高校世界史では2330字を使って、戦後日本に対する米国の占領状況や東京裁判について詳しく説明している。また戦後処理だけでなく、とくに日本の経済発展

について詳述し、戦後日本の軽武装による軍事費の少なさや朝鮮戦争をきっかけとした生産性利益の向上、教育の重視政策についても言及しているのである。また「日本は経済力によって、APEC やアジア太平洋地域の経済発展に主導的な影響を与えようとしている。日本はこの地域の援助、投資、貿易などの面で重要な地位を占めている<sup>72</sup>」と指摘し、アジア地域における日本の重要性を強調した。

歴史教科書だけでなく、社会と政治の授業でも日本にかんする記述がみられる。小学社会教科書には、富士山、花見、着物や茶道のような日本の伝統や風習に加えて、神戸の人工島や地下街など現代日本の経済や生活も紹介され、平和な日本が強調される<sup>73</sup>。政治科目の教科書では1978年から、戦後日本の政治体制、経済発展の要因、社会教育の状況なども紹介し、日本を中国にとって今後の発展模範のように描いているのである。

量的にも、内容的にも、1990年代において中国の教科書は台湾よりも、現在の日本について様々な面からより多く記述しているのである。ただし留意しておくべきは、台湾の教科書では日本以外の外国についても記述が少なく、対日記述だけが少ないというわけではないことである。

以上の分析から、1980年代までは中国と台湾の教科書における対日記述に大きな違いはみられないが、90年代以降になると、一方で中国の教科書は様々な面から幅広く日本について記述するようになり、戦争について厳しい批判の姿勢が保持されつつ、現代日本の紹介も詳しくなり、対日重視の姿勢が強まった。他方で、台湾の教科書は中国の教科書ほどの変化はみられない。90年代前半までは、日本による侵略戦争の記述は中国と大差がない。しかしながら90年代末から、歴史教科書以外の社会や『認識台湾』などの教科書で、日本の植民統治に対する肯定的な評価がみられるようになったのである。

## 終章 結論

以上の分析を通じて、中国と台湾の教科書はともに、時代の変化によって、量的にも内容的にも変化が見られることが分かる。中国では、このような「時代性」はより強く、国の政策が教科書に反映される傾向がある。台湾では、政策の変化による記述の内容の変化は大きくないが、長期的には若干の変化がみられる。

兩岸の教科書はともに、日本にかんする記述について近代における日本の戦争が中心であることでは共通している。また、戦争中の日本の侵略行為に対する批判についても同様である。時代によって批判は量的に増減があり、内容面で厳しくなったり、柔軟になったりするが、80年代までに兩岸ともにほとんど批判的な記述であった。しかし90年代に入ると、兩岸の記述に違いが見られるようになる。中国では、対日記述が全体的に増えるにつれ、戦争中の日本に対する批判はより具体的で、厳しく批判するが、同時に戦後日本の紹介と高度経済発展を実現した日本を模範とする記述もみられるようになった。このことは、90年代に中国政府が日本に対して歴史問題を執拗に言及するとともに、「経済大国」日本を重視する一見矛盾した姿勢が、教科書にも反映されていると言えよう。これはまた、一般国民の間にもみられる90年代の歴史認識をめぐる対日批判と現在の日本への憧れの並存を反映しているのかもしれない。

台湾では、対日記述が少なくなるとともに、日本のアジア侵略などの戦争に関連する記述も急激に減少し、一部には『認識台湾』のように、日本の植民統治の台湾発展への貢献に対する肯定的な記述も表れた。しかし、植民統治に対する肯定的な記述は歴史教科書ではなく、社会や認識台湾の教科書に限ったものであり、歴史教科書は依然として中国の歴史を中心としており、日本による侵略の過去に対して批判的である。日本の植民統治に対する認識の変化は、日本による植民地統治時代がオランダ統治時代や清朝統治時代と並んで相対化されていることと関係があるだろう。国民党による台湾統治の50年間に、台湾が大陸から分離した状況で独自の文化を形成し、台湾人が「台湾認同（アイデンティティ）」をもちはじめたことによっても対日認識が変化したが、これも関連しているだろう。

兩岸の教科書の対日記述の違いにかんする分析から、中国と台湾の対日認識が同じような起点から出発し、80年代までは大きな変化が生じなかったものの、90年代に入ると対日認識に相違が現れるようになったのである。おそらく兩岸の政治情勢がこれまでのように発展していけば、その違いがますます広がるだろう。

<sup>1</sup>小島朋之「歴史問題と『パートナーシップ』—江沢民訪日の問題と成果」『世界週報』（1998年12月29日号、頁6）。

<sup>2</sup>「日中共同世論調査」『読売新聞』（1999年9月30日朝刊）。

<sup>3</sup>「対談李登輝／司馬遼太郎 場所の悲哀」司馬遼太郎『台湾紀行』（朝日新聞社、1997年、389-390頁）。

<sup>4</sup>中国と台湾の習慣として中国と台湾両方のことを言うときに、「兩岸」を使っているの、本稿において中国と台湾を表現するときに、「兩岸」を使う。

<sup>5</sup>段瑞聡「中国における歴史教育と日中関係—中学校・高校の歴史教科書を手がかりに」『杏林社会科学研究』（2000年3月号、P39-64）。

<sup>6</sup>並木頼寿「中国の教科書の中の日本と日本人」山内昌之・古田元夫編『日本イメージの交錯』（東京大学出版会、1997年）。

<sup>7</sup>蕭勝文「国（初）中歴史教科書中『近現代中日関係』教材之研究（1923-1999）」（台湾、「歴史教科書與歴史教育」學術検討会、論文、2000年11月17日・18日）。

<sup>8</sup>平松茂雄、多仁安代「日本統治時代を問い直す教科書『認識台湾』——注目される李登輝政権の歴史観」『東亜』（1999年2月号）。

<sup>9</sup>古森義久「日中再考—歴史の教え方」『産経新聞』2001年2月27日、28日、3月2日、3日、4日、6日、7日、8日、9日、10日、11日、13日、14日、15日。

<sup>10</sup>研究資料は以下の通り。

中国

- 小学：歴史 『高級小学歴史課本』1-4冊 1950-51年版  
『高級小学課本—歴史』1-4冊 1956年版  
『十二年制学校高級小学課本—歴史』1-3冊 1962-63年版  
『全日制五年制小学課本（試用本）—歴史』上、下冊 1981年版  
『小学課本—歴史』上、下冊 1984年版  
『小学課本—歴史』上、下冊 1991-92年版
- 社会 『九年義務教育六年制小学教科書—社会』1994-98年版
- 国語 『初級小学課本—語文』1-8冊 1952-53年版  
『高級小学国語課本』五年用、六年用 1952年版  
『六年制小学語文課本』1-12冊 1956年版  
『十年制学校小学課本—語文』1-10冊 1961年版  
『全日制十年制小学語文課本』1-10冊 1978年版  
『五年制小学課本—語文』1-10冊 1982-84年版  
『六年制小学課本—語文』1-12冊 1984-85年版  
『六年制小学課本—語文』1-12冊 1993年版
- 政治 『高級小学—政治課本』1-2冊 1950年版  
『全日制十年制学校小学課本—政治』1-3冊 1978-79年版  
『小学課本—思想品德（試用本）』1-12冊 1986-87年版  
『全日制小学試用教材—思想品德』1-12冊 1988年版  
『九年義務教育六年制小学教科書—思想品德』1-12冊 1992-98年版
- 中学：歴史 『初級中学—外国歴史課本』上、下冊 1952年版  
『初級中学—本国近代史課本』上、下冊 1953年版  
『初級中学課本—中国歴史』1-4冊 1955-56年版  
『初級中学課本—世界歴史』上、下冊 1955-56年版  
『九年一貫性試用初中課本—歴史』1-3冊 1960年版  
『十二年制学校初級中学課本—中国歴史』1-4冊 1963-65年版

- 
- 『初級中学課本－中国歴史』1－4冊 1979－80年版  
 『初級中学課本－中国歴史』1－4冊 1987年版  
 『初級中学課本－世界歴史』全一冊 1989年版  
 『九年義務教育三年生初級中学教科書－中国歴史』1－4冊 1992－95年版  
 『九年義務教育三年制初級中学教科書－世界歴史』1－2冊 1994－95年版
- 国語 『初級中学語文課本』1－6冊 1951年版  
 『中学語文課本』1－6冊 1958年版  
 『全日制十年制学校中学語文課本』1－6冊 1961年版  
 『全日制十二年制学校中学語文課本』1－4冊 1963－64年版  
 『全日制十年制学校初中語文課本』(試用本)1－6冊 1978年版  
 『全日制十二年制中学語文課本』1－6冊 1982年版  
 『中学語文課本』(修訂本)1－6冊 1988年版  
 『全日制九年義務教育初中語文教科書』(試験本)1－6冊 1989年版  
 『九年義務教育三年制初級中学教科書』1－6冊 1992－95年版
- 政治 『中学課本－道德品質教育』(試験教材)1951年版  
 『初級中学課本－政治常識』1956年版  
 『初級中学－政治常識』(代用教材)一、二年級用、三年級用 1959年版  
 『中学課本－政治常識』(試選教材) 1960年版  
 『中学課本－道德品質教育』(試選教材) 1961年版  
 『中学政治課本－作革命的接班人』(試用教材) 1964年版  
 『全日制十年制学校初中課本－社会發展簡史』(試用本)上、下冊 1978年版  
 『全日制十年制学校初中課本－社会發展簡史』(試用本)上、下冊 1982年版  
 『初級中学課本－社会發展簡史』上、下冊 1985年版  
 『初級中学実験課本－公民』上、下冊 1986年版  
 『初級中学実験課本－中国社会主义建設常識』上、下冊 1986年版  
 『初級中学実験課本－社会發展簡史』上、下冊 1987年版  
 『初級中学課本－中国社会主义建設常識』(試用本)上、下冊 1990年版  
 『義務教育初級中学教科書－思想政治』(実験本)1－4冊 1993年版  
 『九年義務教育三年制初級中学教科書－思想政治』1－5冊 1995－97年版
- 高校：歴史 『高級中学－本国近代史』上、下冊 1951年版  
 『中国人民解放戦争簡史』全一冊 1953年版  
 『高級中学課本－世界近代現代史』上、下冊 1956年版  
 『高級中学課本－中国現代史』全一冊 1960年版  
 『高級中学課本－世界歴史』上、下冊 1978年版  
 『高級中学課本－世界歴史』上、下冊 1981年版  
 『高級中学課本－世界歴史』1－2冊 1991年版  
 『高級中学課本－中国歴史』上、下冊 1992－93年版  
 『全日制普通高校中学教科書－中国近代現代史』(試験本)上、下冊 1996－97年版  
 『全日制普通高校中学教科書－世界近代現代史』上、下冊 1995-96年版
- 国語 『高級中学語文課本』1－6冊 1951年版  
 『高中文学課本』1－4冊 1956年版  
 『全日制十二年制学校高中語文課本』1－6冊 1964年版  
 『全日制十年制学校高中語文課本』(試用本)1－6冊 1978年版  
 『全日制十二年制中学高中語文課本』(正式本)1－6冊 1982－85年版  
 『全日制高級中学語文課本』1－6冊 1988－95年版
- 政治 『高級中学代用課本－関与經濟体制改革的幾個問題』1985年版 1987年版  
 『高級中学実験課本－政治常識』全一冊 1986年版 1987年版 1988年版 1989年版  
 版 1990年版  
 『高級中学実験課本－經濟常識』上、下冊 1986年版 1988年版 1989年版  
 『高級中学課本－科学人生觀』(試用本)上、下冊 1989年版 1990年版

---

『高級中学試用課本－思想政治』1－3年用 1992－93年版

台湾

- 小学：社会 『国校高年級－社会』（暫用本）3－4冊 1952年版  
 『国民学校－社会課本』（暫用本）1－4冊 1966－68年版  
 『国民学校－社会』1－8冊 1968－72年版  
 『国民小学－社会』1－12冊 1977－83年版  
 『国民小学－社会』1－12冊 1978－84年版  
 『国民小学－社会』1－12冊 1986－92年版  
 『国民小学－社会』1－12冊 1989－95年版  
 『国民小学－社会』1－10冊 2000－2001年版
- 国語 『国民学校高級－国語課本』（修訂暫用本）1－4冊 1963－68年版  
 『国民学校－国語課本』1－12冊 1967－72年版  
 『国民学校－国語』1－12冊 1968－74年版  
 『国民小学－国語』（試用本）1－12冊 1979－83年版  
 『国民小学－国語』1－12冊 1986－92年版  
 『国民小学－国語』1－12冊 1989－95年版  
 『国民小学－国語』1－12冊 1997－2000年版
- 中学 歴史 『初級中学－歴史』1－6冊 1949－51年版  
 『初級中学標準教科書－歴史』1－6冊 1953－55年版  
 『初級中学標準教科書－歴史』1－6冊 1963－65年版  
 『国民中学－歴史』1－5冊 1969－71年版  
 『国民中学－歴史』1－5冊 1973－75年版  
 『国民中学－歴史』1－5冊 1981－83年版  
 『国民中学－歴史』（試用本）1－5冊 1984－86年版  
 『国民中学－歴史』（修訂本）1－5冊 1985－87年版  
 『国民中学－歴史』1－5冊 1986－88年版  
 『国民中学－歴史』1－5冊 1989－91年版  
 『国民中学歴史教科書』1－4冊 1998－2000年版  
 『国民中学歴史教科書』1－3冊 1999－2000年版
- 認識台湾 『認識台湾』（歴史編）（試用本）1997年版  
 『認識台湾』（歴史編）1998年版  
 『認識台湾』（社会編）（試用本）1997年版  
 『認識台湾』（社会編）1998年版
- 国語 『初級中学標準教科書－国語』1－6冊 1953－55年版  
 『初級中学標準教科書－国語』（修訂本）1957－58年版  
 『初級中学標準教科書－国語』1－6冊 1963－65年版  
 『国民中学－国語』1－6冊 1968－76年版  
 『国民中学－国語』1－6冊 1981－87年版  
 『国民中学－国語』1－6冊 1985－89年版  
 『国民中学－国語』1－6冊 1989－2000年版
- 高校：歴史 『高級中学標準教科書－歴史』1－4冊 1953－56年版  
 『高級中学標準教科書－歴史』1－4冊 1958年版  
 『高級中学標準教科書－歴史』1－4冊 1964－65年版  
 『高級中学標準教科書－歴史』1－4冊 1971－73年版  
 『高級中学－歴史』1－4冊 1984－86年版  
 『高級中学－世界文化史』上、下冊 1986－87年版
- 国語 『高級中学標準教科書－国文』1－3冊 1953－54年版  
 『高級中学標準教科書－国文』1－6冊 1957年版  
 『高級中学標準教科書－国文』1－6冊 1963－68年版  
 『高級中学－国文』1－6冊 1971－75年版  
 『高級中学－国文』1－6冊 1984－87年版

『高級中学－国文』1－6冊 1994－97年版

- 11 魏光明編『中国政策（一九九八）』（中国法制出版社、1999年）頁185。
- 12 学習指導要領に相当する。
- 13 抗日戦争時期と内戦時期における共産党の根拠地である。
- 14 <http://www.moe.edu.cn/moe-dept/jichu/a02.htm>
- 15 <http://www.moe.edu.cn/moe-dept/jichu/a02.htm>
- 16 中国の中学校、高校の歴史科目は自国史と世界に分かれており、小学の歴史科目では、自国史と世界史を併せて歴史という教科書を編集している。
- 17 1994年から小学校にて開始された新しい科目。
- 18 教育部（台湾）編『国民小学課程標準』（台捷国際文化実業股份有限公司、1994年）。  
教育部編『国民中小学九年一貫課程暫行綱要』（教育部、2001年）
- 19 教育部国民中学課程標準編輯審查小組『国民中学課程標準』（教育部、1995年）  
教育部編『国民中小学九年一貫課程暫行綱要』（教育部、2001年）
- 20 教育部高級中学課程標準編輯審查小組『高級中学課程標準』（教育部、1996年）
- 21 王仲孚「試論中学歴史教科書の特性」（台湾、「歴史教科書與歴史教育」学術検討会、論文、2000年11月17日-18日）。
- 22 教育部国民中学課程標準編輯審查小組『国民中学課程標準』（教育部、1995年）786頁。
- 23 蕭勝文「国（初）中歴史教科書中『近現代中日關係』教材之研究（1923－1999）」（台湾、「歴史教科書與歴史教育」学術検討会、論文、2000年11月17日-18日）。
- 24 台湾の中学、高校の歴史科目は自国史と世界に分けているが、小学の歴史科目がない。
- 25 小学校だけの科目である。
- 26 熊明安編『中国近現代教学改革史』（重慶出版社、1999年）171頁。
- 27 資料収集の原因で、第2次大戦を記述する1951年版の高校歴史教科書の下冊が入手できず、小、中学の教科書だけになった。
- 28 人民教育出版社改編『高級小学歴史課本－第三冊』（人民教育出版社、1951年）25-26頁。『高級中学本国近代史－上冊』（人民教育出版社、1951年）139頁。
- 29 熊明安編『中国近現代教学改革史』（重慶出版社、1999年）331頁。
- 30 たとえば、琉球（沖縄）、台湾、朝鮮半島での侵略など。
- 31 『高級中学課本－世界歴史－下冊』（人民教育出版社、1978年）187－189頁。
- 32 熊明安編『中国近現代教学改革史』（重慶出版社、1999年）336頁。
- 33 例えば『全日制普通高校中学教科書－世界近代現代史－下冊』（人民教育出版社、1996年）70頁、90－94頁、122－124頁、130－131頁。
- 34 『全日制普通高校中学教科書－世界近代現代史－上冊』（人民教育出版社、1995年）149頁；『全日制普通高校中学教科書－世界近代現代史－下冊』（人民教育出版社、1996年）155頁。
- 35 『社会発展簡史－下冊』（人民教育出版社、1985年）24頁。
- 36 『公民－上冊』（人民教育出版社、1986年）80－81頁。
- 37 『政治常識』（人民教育出版社、1989年）41－42頁、日本の君主立憲制について；75頁、日本の議員選挙についてなど。
- 38 『政治経済常識（試用本）－上冊』（人民教育出版社、1981年）53－54頁、日本の六回の経済危機についてなど。
- 39 『科学人生觀－下冊』（人民教育出版社、1988年）104頁、日本の経済成長と教育の関係についてなど。
- 40 『政治常識』（人民教育出版社、1986年）22頁など。
- 41 『科学人生觀－下冊』（人民教育出版社、1989年）43頁など。
- 42 『思想政治－三年級』（人民教育出版社、1993年）82頁。
- 43 『全日制中学語文教学大綱－高中部分（修訂本）』（中華人民共和國国家教育委員会、1995年）。
- 44 『高級中学標準教科書－歴史－4冊』（国立編訳館、1965年）76－77頁。
- 45 教育部国民中学課程標準編輯審查小組『国民中学課程標準』（教育部、1995年）786頁。
- 46 『国民中学－歴史－3冊』（国立編訳館、1970年）28頁；『国民中学－歴史－5冊』（国立編訳館、1971年）21－22頁。
- 47 教育部高級中学課程標準編輯審查小組『高級中学課程標準』（教育部、1996年）852－853頁。
- 48 四育は道徳、知力、体育、皆と良くなることである。

- 
- 49 教育部国民中学課程標準編輯審查小組『国民中学課程標準』（教育部、1995年）789頁。
- 50 『国民中学－歴史－5冊』（国立編訳館、1975年）65頁。
- 51 『国民中学－歴史－3冊』（国立編訳館、1982年）19—20頁；『国民中学－歴史－3冊』（国立編訳館、1982年）88—89頁。
- 52 『国民中学－歴史－3冊』（国立編訳館、1990年）77—78頁。
- 53 『国民中学－歴史－3冊』（国立編訳館、1990年）58頁。
- 54 『国民中学－歴史－3冊』（国立編訳館、1990年）101頁。
- 55 全部で第1冊—第4冊までであるが、第4冊は2001年に出版予定。
- 56 字数の変化は1999年—2000年版の正式本の第4冊が出版の予定であり、統計データに入れられていからである。
- 57 高校の歴史教科書は90年代末まで84年—86年版の教科書を続けて使っていたので、第2節で述べたので、ここで省略する。
- 58 本論文第四章の第2節を参考のこと。
- 59 『国民中学－認識台湾（歴史篇）』（試用本）（国立編訳館、1997年）57—61頁。
- 60 『国民中学－認識台湾（歴史篇）』（試用本）（国立編訳館、1997年）57—61頁。
- 61 『国民中学－認識台湾（歴史篇）』（試用本）（国立編訳館、1997年）66—70頁。
- 62 『国民中学－認識台湾（歴史篇）』（試用本）（国立編訳館、1997年）81—82頁。
- 63 『国民学校－社会（第1冊）』（国立編訳館、1968年）－編集要旨。
- 64 2001年2月まで1—10冊が出版され、11—12冊はまだ出版されていないため、1—10冊までの教科書を対象としている。
- 65 黄俊傑『台湾意識與台湾文化』（正中書局、2000年）37—42頁。
- 66 『初級中学課本－中学歴史（第4冊）』（人民教育出版社、1956年）57頁。
- 67 『九年一貫制試用初中課本－歴史（第3冊）』（人民教育出版社、1960年）130—133頁。
- 68 『高級中学課本－中国歴史（下冊）』（人民教育出版社、1993年）38—42頁。
- 69 『国民学校－社会（第4冊）』（国立編訳館、1970年）11—14頁。
- 70 『国民小学－社会（第7冊）』（国立編訳館、2000年）116—118頁。
- 71 『高級中学標準教科書－歴史（第4冊）』（国立編訳館、1956年）137—138頁。
- 72 『全日制普通高校中学教科書－世界近代現代史（下冊）』（人民教育出版社、1996年）122—124頁。
- 73 『九年義務教育六年制小学教科書－社会（第6冊）』（人民教育出版社、1996年）59—65頁。